

日文研

2020年9月

no.65

International Research Center for Japanese Studies

国際日本文化研究センター

日 文 研
六十五

二〇二〇年九月

国際日本文化研究センター

LETTERA
A N N A L E
DEL GIAPONE
SCRITTA

AL PADRE GENERALE
DELLA GOMPAGNIA
DI GIESV

Alli xx. di Febraio M.D.LXXXVIII.



*Neuf. l.
May 1792.*

IN ROMA.
Appresso Francesco Zannetti, in Piazza di
Pietra. 1590.

CON LICENZA DE'SUPERIORI.

フロイス著『1588年日本年報』ローマ、1590年

ルイス・フロイスは毎年イエズス会本部宛に日本年報を送付していた。ポルトガル語で書かれていたこれらの日本年報は、随時ローマでイタリア語に訳され、刊行されていた。1590年に刊行された本書に収められているのは、1588年2月20日付のルイス・フロイスによる日本年報のイタリア語訳である。1587年～1588年の日本の政治状況を記録したもので、特に秀吉によるパードレ追放令の布告およびその追放令によるキリスト教の布教活動への影響を詳細に記録している点で、重要な内容を含む貴重な史料である。同書には日本各地におけるキリスト教の置かれた状況や高山右近をはじめとする各キリシタンの動向も詳細に記述されている。また、細川ガラシャの洗礼をはじめ、ガラシャの人物像についての記述やガラシャからセスペデス神父に宛てた書状のイタリア語訳も掲載されている。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス教授）

日大研

— エッセイ —

小特集「パンデミックに思うこと」
吉川弘晃 パンデミックの慢性化に備えて—ある院生のぼんやりとした所感—

郭海紅 中日米の狭間に生きる

ジョン・ブリーン 新型コロナウイルスの日々…日本とイギリスの間

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス メディア・プラットフォームとパンデミック

姜 姍 アマビエからヨゲンノトリまで —「疫病退散」についてのお守りたち—

稲賀繁美 「パンデミック」は何の予兆なのか？—身近な「悔い改め」への舵取りのために

共同研究

基礎領域研究

彙報

所員活動一覧

79

65

63

42

36

28

22

18

11

4

2

エッセイ

小特集「パンデミックに思うこと」

二〇二〇年が明けた当初、このような事態が起こることを誰が予測できただろう。

一月九日に中国政府が新型コロナウイルス検出を発表し、二月に日本で初めて感染による死者が確認されてもなお、私たちの日常はまだ安穏としていた。しかし、感染症の猛威が三月末までにはアジア、ヨーロッパ、アメリカを席卷し、八月現在ほぼ全世界の諸地域へと拡大を続けている。政治・経済・文化の多方面にわたるネットワークがウイルスの「グローバル」な移動を可能にする一方、国境が次々と封鎖され、ヒトの移動が制限されたのは皮肉な展開といえない。

日文研でも四月初旬から在宅勤務制度が実施され、当面の主催行事・イベントの相次ぐ中止・延期が決定された。教職員の海外への出張はおろか、国内の移動も一時は禁止となった。それ以上に深刻なのは、日文研の使命の一つである海外の日本研究者への支援と交流事業に大きな支障が出たことである。滞在中だった外国人・外来研究員の何名かは、任期を残しながら早期帰国を余儀なくされ、逆に帰国予定だった人びとは日本に足止めされた。新年度に着任が決まっていた研究者の渡航計画も軒並み変更となっている。

私たちの日常は大きく変わった。通勤時や職場ではマスク着用が半ば義務づけられ、他人との間に「社会的距離」を取ることが新たなマナーとなった。会議や研究会、セミナー、授業は

いずれも、ビデオ通話等の遠隔的な通信手段に頼らざるを得ない。視線を合わせた対話が叶わず、相手の表情に真意を汲み取ったり、その場の声に耳を傾けたりといった、ふだんの触れ合いが当たり前のものではなくなつた。人間の文化的な営みが著しく阻害された状況といえる。

今、ウィルスと共生する日々のなかで、個々の記憶を言葉として残したいと考え、小特集を企画した。幸い、予想以上に多くの方がたが自発的に文章を寄せてくださった。それぞれに困難を抱えながら、それでも、発想を前向きに転換させるためのヒントがそこには隠れている。

白石 恵理（国際日本文化研究センター助教）

小特集「パンデミックに思うこと」

―ある院生のぼんやりとした所感―

吉川 弘 晃

はじめに

この「緊急事態」下、多くの人文学者が、その方法や効果は様々ではあるが、「歴史の教訓」を訴えようと懸命に動いている。「ミネルヴァの梟は迫り来る黄昏時によりやくその飛翔を始める」とはよく言ったものだが、単なる怠けた小鼻には俯瞰的な論評は難しい。身近な研究生活で感じたことを率直に語ることにした。このエッセイは、コロナ・ウィルスで生じている困難、それに対して実践可能な対策、今後近いうちに予想される障害の三点を、一人の院生の視点から扱うものである。

本論に入る前に、昨年度末（二〇二〇年三月）の個人的な思い出から始めたい。二月頃から強力な伝染病が武漢の街を阿鼻叫喚の地獄にしていることは耳にしていたが、それは endemic（域内的伝染）はおろか、epidemic（超域的伝染）を跳び越えて、pandemic（全域的伝染）へと変貌するほどの電光石火ぶりであった。その状況を身に染みて感じたのは、日文研の AAS（Association for Asian Post）大会への参加中止の報を聞いた三月九日であった。

Studies) は周知の通り、世界最大の伝統的な「アジア」地域研究の学会のひとつである。各分野での最高水準の学術報告、独創的・挑戦的なパネル、そして何より疾風怒濤の米語と丁々発止の討議……、「国際的な日本研究」を目指す上でこうした波濤に採まれる経験は重要であると聞かされていたし、所属先から惜しみない参加支援を受けた。だが、コロナの猖獗が台州国での大会そのものを吹き飛ばすのは一瞬であった（三月一〇日）。

貴重な国際学会への参加機会の喪失は無念であったが（同様の理由で、三月初旬に予定されていたリトアニアでのポスター報告もキャンセルしていた）、同時に強く直感したのは、パンデミックが慢性化する短中期的な状況のなかで、人文学を続けるための対策を自分なりに考案せねばならないということであった。このエッセイを執筆している時点（二〇二〇年六月）の日本国内では「緊急事態宣言」が解かれ、「第一波」は過ぎ去ったとされているが、首都圏での感染者の数は予断を許さない状況にあるし、「第二波」で膨大な犠牲を蒙っている地域も少なくない。「日本研究」の世界に入ったばかりの私にとって既に幾つかの深刻な困難が生じている。なお、現時点での私の研究テーマは、二〇世紀前半の日本知識人によるソ連文物の導入とその影響である。手段については、同時代の広範な国際関係史の枠組で本テーマを捉えるため、日露両国の刊行資料や所蔵文書を中心に扱う一方、西欧諸国での先行研究や一次史料を補足的に用いることになる。

パンデミック発生期の問題

こうした私の立場を踏まえた上で、第一に、現時点で生じている人文学研究における困難をインプットとアウトプットの両面から一つずつ論じてみよう。

前者については、「図書館・文書館へのアクセス制限」を取り上げねばならない。今回のパ
ンデミック発生直後、国立国会図書館をはじめ、全国各地の公共図書館と文書館が、大幅な
サービス制限に踏み切った。無論、発送サービスなど様々な代替手段が講じられたし、現時点
では利用時間縮小を除けば、ほとんどの施設が問題なく利用できる。とはいえ、人文・社会科
学は原史料や関連文献への依拠なしに実証研究は不可能である以上、この数ヶ月は喪われたに
等しいと感じる研究者は少なからう。さらに、こうしたインプット面での混乱状態が長く
続く地域に閲覧すべき文献が所在する場合、研究課題の変更、少なくとも研究計画の修正が求
められよう。

アウトプット面では「成果報告の機会の減少」が挙げられる。成果報告の早期化・国際化・
増大化が強く奨励される昨今の人文系の潮流では、一年間にどれだけの業績を目に見える形で
公表できるかは、博士課程の（今や修士過程を含む）院生にとって二重の意味で「デッドライ
ン」である。一つには、国内外での学会報告や学術論文出版の数が、研究費・助成金獲得の成
否（つまり研究生生活の「死活」問題に直結する）を決定するからであり、もう一つは、それが
決まった期間で博士論文を書き上げる（つまり「締切」を遵守する）ための証明書となるから
である。実際、私が学部・修士課程を過ごした二〇一〇年代には、多くの研究会やシンポジウ
ムで数多く報告していこうという競争的な雰囲気若手の間で共有されていたし、他ならぬ私
もまた、その潮流に便乗した。従って、そうした競争への数多の参入機会が今回のパンデミッ
クで物理的に断ち切られてしまったのは、業績主義のもとで生きざるを得ない大学院生たちに
とって精神的な動揺をもたらしているのは確かだ。

現時点で実践可能な対策

第二に、以上で示した困難に対して現時点で実践可能な対策を私の経験から紹介したい。まず、インプット問題に対しては「オンラインでの文献閲覧」で部分的な解決を試みている。ロシア（場合によっては北米の）所蔵史料を用いる必要がある私にとって、この事態は極めて深刻だが、逆に言えば日本や西欧諸国の文献から捌いていくという、つまり取り組む研究課題の優先順位を変更するという迂回路が辛うじて開かれている。日本語文献については、国立国会図書館デジタルコレクションに頼っている。戦前の文献で著作権処理が済んだものはネット環境がある場所からアクセス及びダウンロード可能であるし、そうでないものも日文研図書館などからアクセス可能である。英独仏の各国語文献は、その多くは部分的にはあるが、Google Books から閲覧することが可能だし、史料・雑誌・研究書の一部をダウンロードできるサイトも多い。研究で出会った項目や人名を Wikipedia で検索し、各国語版ページの記述を比較して、そこで示された参考文献を Google Books など で調査するという方法を使うと、意外な結びつきを発見することも少なくない。一九二七年、ソ連が各国の知識人を招待した「十月革命一〇周年記念祭」について書いた小論では、日本から参加した文学者・秋田雨雀が、ギリシャやドイツ、フランスなどの知識人と交わした交流について、各人の回想録や小説を分析することで明らかにしたが、その過程では Wikipedia と Google Books の併用が大いに役立った。

次にアウトプット問題については「副専攻をやること」で対策できる。学位取得の早期化が求められるなか、「一所懸命」とそが博士課程の美德であるのは日本に限った話ではなからう。それに対して私は学部以来、専門外の勉強にうつつを抜かし、数打ちや当たるの感覚で諸言語に手を出し、研究テーマを二転三転させてきた。こうした「浮気性」は勧められるものではな

いし、そのツケは毎日のように支払われている。一方、図書館や文書館という手段を封じられる事態が生じた目下、研究の目的・手段を固く絞り過ぎることそれ自体がリスクと化したとは言えないだろうか。私自身は、あくまで博論執筆を第一義とすることを忘れないようにしつつも、そこから派生する研究も構想しているし、あるいは歴史学の思想・方法論についても別の研究テーマをもっている。こうしたサブテーマは、メインテーマと交差すれば博論に寄与するし、そうでなくとも（否、そうでないゆえに）博論が上手く進まない時の清涼剤としても機能する。突破口としてのサブテーマは日文研でもお馴染みの共同研究会から「外部注入」されることが多いが、内発的にサブテーマを生み出す上で、諸言語の習得や周辺分野の知識を常備しておくことが実際に効いている。

パンデミック慢性化後の課題

個人単位であれ社会単位であれ、病気というものは発生後より慢性化してからの方が遥かに厄介である。パンデミックが慢性化して「第n波」や「変異型」の流行と共存していかざるを得なくなった「アフター・コロナ」期には更なる困難が予想される。

これまで延々と論じてきた「傾向と対策」は全てインターネット環境を常時、ストレスなく利用できることを前提にしている。だがその前提そのものが部分的にはあれ崩れたらどうなるのだろうか。今後ますます進むであろう、業務のリモート化一つをとってみても、個人のIT環境やスキルの違いによる現場の混乱、ITインフラの突発的な破綻といった事態は容易に予想される。とすれば、検索（フロー）型に比べて時代遅れとされた、積ん読（ストック）型の知的実践がインプット面で見直されるのではないだろうか。ネット環境なしで研究を進め

られるだけの書齋と作業ルーチンの構築から出発せねばならない。

加えて私の周辺では、夕方から夜間に研究会をリモートで行っていると、自室の壁が薄いために隣室から苦情を受けたという事例が認められている。情報保護や感染防止の観点から喫茶店で行うのも難しいことを考えると、そもそもリモート会議を問題なく行える環境そのものが実は希少なのではないか。夜を徹して古典を会読したり、共同研究のネタを討議したりするのは、人文学徒の豊穡な思考にとって必要不可欠であるはずだ。^{iv} とすれば、そんな「当たり前」に高いコストを支払わなくてはならない将来、人文学 (scholarship) とは、読んで字のごとく、間暇 *oyoihi* (skhole) を十分にもつ限られた人々 (彼らが大学にいるとは限らない) のものになっていくのか。これは下らぬ杞憂だと願いつつ、孤独に暇を耐える術を磨いていきたい。

(総合研究大学院大学・学生／日本学術振興会特別研究員 (DC1))

- i 若手の歴史研究者への支援の試みとして「歴史家ワークショップ」(東大・日本経済国際共同研究センター CIRJE を母体とする) がある。英語での研究発表会 Research Showcase を定期的に開催しており、二〇二〇年七月には日本史・日本文学編も実施。 <https://historiansworkshop.org/>
- ii 拙稿「秋田雨雀のソヴィエト経験(一九二七)―ウクライナ・カフカス旅行における西洋知識人の交流を中心に―」『人文学の正午』九号、一一二八頁。

- iii その出発点は次の通り。拙稿「書評 遅塚忠躬『史学概論』(東京大学出版会、二〇一〇年)」「想文」創刊号、九六―一〇三頁。

https://researchmap.jp/viator-634/misc/23686799/attachment_file.pdf

- iv 実際、私の秋田研究はギリシャ現代文学を専攻する福田耕佑氏との共同研究に依拠するところが多く、その成果はギリシャの日本学のための記事に反映された。

<https://www.greecejapan.com/japanesestudies/o-nikos-kazantzakis-kai-i-neoelliniki-logotexnia-ston-tomea-tis-iaponologias/>

小特集「パンデミックに思うこと」

中日米の狭間に生きる

郭 海 紅

二〇一九年九月、楽しみにしていた日文研での研究生生活の幕がやっと開いた。土日開催の共同研究会、所長主催のランチミーティング、世界から集まる日本学研究者との対話、コモングルームで休憩する至福の一刻、教員が一回ずつ担当する日本研究基礎論の聴講、いずれもひらめきタイムであり、緊張したり、期待したりと、規律正しい日文研の暮らしであった。

ところが、新型コロナウイルス感染症の発生により、二〇二〇年は決して穏やかな一年ではなくなった。五月初めに読んだ『現代民俗誌の地平』の「刊行のことば」に「このシリーズで目論んだのは、ポスト・フェストゥムとしての民俗学ではなく、二一世紀への胎動となるアンテ・フェストゥムとしての民俗学である」という一文があった。「フェストゥム」とは何の意味か全然見当がつかず、電子辞書にも載っていないくて、ネットで検索してようやく分かった。木村敏という有名な精神科医が人間の心理的時間感覚を「祭りの前（アンテ・フェストゥム）」「祭りの後（ポスト・フェストゥム）」「祭りの最中（イントラ・フェストゥム）」の三つに分類し、医学の分野で注目されたという。「祭りの前」が総合失調症的、「祭りの後」が躁鬱病的、「祭りの最中」がてんかんのと考察されている。

もちろんパンデミックは期待されて起こるものではなく、祭りみたいに予定されたものでもない。突然発生し、さらに悪い方向へ向かってしまう出来事である。だが所定の秩序の打破と非日常との対面において、祭りと似通う心意や行動などが出てくる。ちなみに木村も「祭り（フェストゥム）は喜びであり、楽しみであると同時に、冒険であり、危険がいっぱいな場所である」と指摘している。以下に、自分自身の身の回りに起きた出来事とそれによる心情の変化を整理し、心理的時間感覚の分類にも目を配り、パンデミックに思ったことを綴ってみる。

一 アンテ・フェストゥム

二〇一九年一二月のクリスマスから二〇二〇年一月のお正月休みまでの丸二週間は、あるプログラムの応募申請書類の作成に追われた毎日であった。正月三が日もほぼ研究室に來ているS先生を見て、おのずから一種の仲間感覚が生まれ、励まされたような気分になった。年末年始の休みが終わり、日文研も元通りの人出になり、様々な打ち合わせや交流の風景がコモングルームに戻った。一月下旬のある日、昼過ぎにコモングルームで中国籍の先生たちが集まったのを見かけた。L先生に呼ばれ話の輪に入り、様々な話題に花が咲いた。日本語専攻の学生の日本語能力の低下傾向だったり、国際結婚における文化の差異及び広く一般的な婚姻維持の心得だったり、長崎出張で見かけた日中交流に関わる絵や写真や道具など実物資料の議論だったり、日常生活から研究まで話題は尽きず、コロナに関する話などほぼ一言も出ないまま、ただ和気藹々とした雰囲気だったことを鮮明に覚えている。

一月二四、二五日の土日は、ちょうど中国の旧正月の除夜と元日の祝日となる。今回の旧正月は私にとって特別であった。というのは日本で過ごすことになっただけでなく、二日連続で

学術研究会が集中していたことと、息子から嬉しいニュースが入っていたからである。シンボジウムはそれぞれ関西大学と関西学院大学で行われたため、珍しく桂坂から〈脱出〉して、関西地区で名高い「関関同立」の大学を訪問できるのが嬉しかった。一年で一番賑わう時である中国の旧正月を一人で過ごすのはどうしても切ない気がするし、シンボジウムがあることで、心の穴が一気に埋められ、さらに不思議と研究における達成感と満足感も生まれる。ちなみに関西大学の方は、東西学術研究所言語交渉研究班が開催する「言語接触研究の諸相」という例会で、もう一方の関西学院大学は世界民俗学研究センターによって梅田キャンパスで開催される二回目の研究会となる。どちらも私が関心を持つ分野と研究者たちである。

当日、バス停に向かっている時に、息子からオンラインコールがかかってきて、サブライズが知らされた。彼はアメリカの高校での一〇ヶ月間の交換留学プログラムに参加するため、私が日本に行くのとはほぼ同時期にアメリカに渡航した。二〇一九年秋からずっとアメリカの大学の申請諸手続きに手を焼き、気分的にかなり焦っていた。中国の除夜当日の朝、やっと大学から一通目のオフアールを受け取った息子がどれほどホッとしたかは、コールの向こうの高ぶった声からもよく感じ取れた。これで安心して二〇二〇年九月からアメリカの大学に入学できるのだと、家族みんなで喜んだ。

二 イントラ・フェストウム

これまで長々とパンデミックと全く無関係なことが書かれていると思われるだろう。しかし、それが二月に入ると、中国をはじめ、日本とアメリカが相次いで新型コロナウイルスにやられ、まさしくパンデミック状態に陥った。私自身を例にとると、夫と親は中国、息子はアメ

リカ、私は日本、まさに中日米の狭間で身近にパンデミックを感じ、翻弄される思いだった。中国には「コロナとの戦いは、中国は前半戦、海外は後半戦、私たちはフルコースだ」という、留学生とその親たちを皮肉った言い方があるが、これは私のような立場の者に対する歴然とした語り口ではないかと思った。

中国では、旧正月を境に全国一斉に外出規制を強化する態勢に転換した。夫や親のことが心配される。最初の一週間はまだ旧正月中に備蓄しておいた食料があるが、だんだん時間が経つにつれて、食料品の品揃え、外出時の感染リスク、全くの閉じこもりによる身体機能の低下、万が一病気を発症したときの病院の対処など、不安が強まるばかり。私にできるのはチャットを通じたこまめな連絡と、気分転換のネタをなんとか提供することくらいであった。幸い実家と婚家は同じ町にあるので、夫が自家用車による食料品の買い出しと配達を担い、感染リスクを下げることができた。そんな不安と非日常の中、中国では三月いっぱいまで新型コロナウイルスの全国的な改善を迎え、四月に入ると、学校や公園・施設の開放のほか、経済活動などが少しずつ回復の兆しを見せてきた。

その間日本にいた私は、三月二二日、東京で開催の日本女性民俗学研究会第七〇〇回記念例会「未来学としての民俗学」公開シンポジウムを拝聴する予定があり、東京大学のある民俗学者にインタビューする計画も立てていた。もちろん、これらは四月七日に日本政府が緊急事態宣言を行う前に中止となった。一方アメリカにいる息子は、もともとアメリカでさえほとんど知られていないノースダコタ州 (State of North Dakota) のある高校に配属されていた。中国人一人で、地元の人には閉鎖傾向にあり、留学生生活が半年あまり経った二月三月頃になると、さすがに孤独から生まれたストレスが限界に近づき、愚痴が増え、明らかな気分的落ち込みが見

えた。三月下旬にはアメリカの春季休暇が明け、高校もオンライン授業に変更された。ホームステイ先の家庭では、高校のスペイン語教師である女性の方は収入にそれほどの変化はなかったが、男性は屋外のベンキ広告の仕事をやっている、一週間目に家計の話を息子の前でも漏らす事態になった。だが二週目に入ると、アメリカ政府から大人一人当たり一二〇〇ドルの補助金が手早く給付されたという。家計の話もなくなり、心配が和らいだ、と息子から聞いている。

三月から四月、さらには五月中旬を過ぎた段階で、パンデミックは引き続き深刻な有り様を引きずっていて、見通しは不透明である。日本とアメリカでは感染のピークを過ぎた兆しがあるものの、特にアメリカの場合、緩やかに感染が広がる状態から脱出していないのが現状である。息子の帰国航空券は三月と四月には全く入手できなかったり、日常茶飯事のように運航がドタキャンされたりして、困惑の毎日であった。同じプログラムに参加した男の子の父親は何かとして人民元六万元、日本円にして一〇〇万円弱の航空券を購入し、三月いっぱい息子さんを帰国させたそうである。当時その話を息子がどんな気持ちで私に伝えたか、羨ましいのか悔しいのか諦めか、複雑すぎて私にもよく把握できない。このエッセイを書き上げた今、息子もやっとロサンゼルスからアモイに帰国でき、アモイで隔離生活を送っている最中である。帰国できたことをみんなに祝福されたが、五月に入ってもアメリカからの帰国がまだまだ自由にならないことが分かった。日本も似たような状況で、在留期間や航空便が確定しないことによるハプニングが続き、予想外の色々なことに多くの外国人が悩まされていることは容易に推測される。日々事態と対策が変化する中、国内と海外の関係機関からあれこれ通知と規定が飛び交うことには戸惑いもあるし、心理的不安定感が増したのも確かであった。

三 ポスト・フェストウム

人類が迎ってきた歴史を振り返る限り、いくら邪悪なパンデミックでもいつか収束に向かっていくし、あるいは知らず知らずに日常に溶け込んでいくだろう。日本政府が最近よく口にする「長丁場」は、やはり新型コロナと長く付き合っていく、あるいは共存していく覚悟を呼びかける言葉だと思う。二〇二〇年四月九日から日文研は在宅勤務制度を開始し、その日のうちにいち早くカウンターパートナリーのY先生から連絡と慰安の電話をいただいた。それから一ヶ月あまり経ち、図書館は一時的なサービスの縮減を一部再開に変更し、コモンルームの業務も幾度となく調整が実施された。以前の共同研究会は四ヶ月の間は全て中止。でもそんな中で嬉しかったのは、T先生の桂ゼミ「文学・文化史理論入門」が維持されていて、さらにネット飲み会の「居酒屋つぼる」もオープンし、色々勉強させていただいたことである。旧正月に参加したシンポジウムで知り合った関西学院大学のS先生からも、オンライン授業の案内が届き、日文研のレストラン赤おにからも「出勤ご苦労様です」企画が持ち込まれた。図書館は時間外利用の形で私たちを自由に出入り可能にしてくれるなど、些細なことだが確実に日常の秩序と意識が保たれていて、落ち着いた研究生活につながったと考える。他に、家族間の絆や友人との情報交換などに基づくコミュニケーションの促進、コミュニティの形成も精神的な安らぎを与えてくれた。アメリカにいる息子に関して多くの友人が相談相手になってくれたり、学生を含め教職員一同で日文研のアイデンティティを構築していたりしたことはすべて、中日米の狭間でパンデミックに悩まされた私を支えてくれたと感謝する。

旧暦における二〇二〇年が開幕した頃に「可能であれば、二〇二〇年をもう一度スタートラインから新たに始めてほしい」という投稿が中国のSNS上で交わされた。その心情と思いは

まさに「あとの祭り」（ポスト・フェストゥム）。いわゆる「とりかえしのつかぬ」手遅れの意味で、木村敏が鬱病に関する独自の考えで使ったキーワードである。パンデミックがどんどん深刻になる中、自粛要請の解除または疫病の収束をみんながどれほど心の底から待ち望んでいるかは言うまでもない。これもまた、前夜祭を待ちかまえる「祭りの前」（アンテ・フェストゥム）の心理的時間感覚と似たり寄ったりである。このような、やや病理的なアンテ・フェストゥムの「先走り」の気持ちに流されずにじっくりと「祭りの当日」を待つか、もしくはパンデミックを日常体系の下に配置し、祭り気分にならないようにするかは、これから生きていく術の一つになるだろう。

投稿に際し、安井眞奈美先生また編集担当の先生方に丁寧なご修正をいただき、感謝の意を申し上げます、ここに記します。

（中国山東大学教授／国際日本文化研究センター外来研究員）

- （一） 岩本通弥・篠原徹など編『現代民俗誌の地平』、朝倉書店、二〇〇三年、二頁。
- （二） 『木村敏著作集3 躁鬱病と文化／ポスト・フェストゥム論』、弘文堂、二〇〇一年、四二七頁。

小特集「パンデミックに思うこと」

新型コロナウイルスの日々…日本とイギリスの間

ジョン・グリーン

筆者の国イギリスは、人口が六六五万人前後の島国である。筆者が今滞在している日本の人口はその倍近くの一億二六五〇万人となっている。そして、人口の密度からいうと、日本の三三五人／平方キロメートルに対し、イギリスは二五九人／平方キロメートルという数字を出している。二〇二〇年七月二日現在で新型コロナウイルス感染拡大防止対策をその結果からみると、イギリスは大いに失敗しているが、日本は成功している。そういう結論を出さざるを得ないだろう。というのも、日本は感染者数が一万八〇〇〇人しかいなくて、死者の数を一〇〇〇人以下にとどめている。それに対しイギリスは、感染者が三〇万人を遥かに上回り、死者はなんと四万三〇〇〇人にも上っている。日英の単純な比較だが、日本がどれだけうまくウイルスを抑制できたのかを示す一つの尺度となるだろう。

日本とイギリスの比較をもう少し突っ込んでみてみよう。世界のウイルス感染者ランキングというのがある。それを見ると、イギリスは極めて恥ずかしい五位に入っている。つまり世界で感染者が五番目に多い国は、イギリスだ。ついこの間まで二位だったのが、ブラジル、ロシア、インドに追い抜かれてしまった。同じランキングにおける日本の位置づけは、自慢しても

よさそうな五二位である。致死率、つまり感染した人々のうち死者が何人出たのかの統計も、最近特に注目を浴びている。イギリスは世界で三番目に高い致死率を記録しているが、日本は世界の一一五位となっている。数字ばかりで恐縮だが、人口一〇〇万人単位でこの状況を見直してみると、一層はつきりしてくる。イギリスは一〇〇万人あたり四五〇〇人もの人々が感染し、うち六二八人もの死者を出す割合だが、日本は、一〇〇万人のうち感染者が一四五人に過ぎず、そして死者は九人しかない。どの角度から見ても統計は、桁違いの相違を示している。

日本は確かによくやっている。イギリスよりよくやっている。イギリスは失格なので、日本に見習うべきところは多々ある、はずだ。ただ、日本がとった防止対策のどこが特に評価に値するか、またイギリスの対策のどこが特に悪かったのか、そもそもイギリスは日本の何に見習うべきかとなれば、そう簡単には答えられない。ジョンソン政権のレスポンスはヨーロッパの国々に比べて確かに遅かった。でも、安倍政権の出方も韓国などアジアの先進諸国と比べて決して早い方ではなかった。ジョンソン政権も安倍政権も、国民に対し発信してきた情報、指示などは必ずしも明確で理解しやすいものばかりではなかった。

世界保健機関（WHO）が、ウィルスの撲滅、第二波の防御に欠かせないと執拗に言っているのは、PCR検査である。検査に関する統計が面白い。ジョンソン政権ではこれまで九〇〇万人以上の検査を行ってきた。五月に入ってから一日二〇万人以上の検査を現に実施している。この検査の実施数を世界的にみると、イギリスは四位に入る。日本で実施してきた検査数のトータルは四〇万人前後にとどまっている。比較のためにいうが、例えば人口一〇〇〇万人しかないアゼルバイジャン共和国より少ない検査数である。

中央政府から国民に目を転じてみると、どうだろう？イギリスでも日本でも多少の混乱が生

じていたことは事実である。筆者の長男はロンドンの大きな病院で医療従事者（医者）を勤めているが、長男に言わせると、イギリス人はロックダウン、すなわち外出禁止を誠実に守り、またソーシャルディスタンス（例えば、スーパーマーケットなどで前の人と間隔をあける距離）も厳重に実施してきたという。日本の事情は、どうだろう。筆者の素人目にすぎないし、科学的根拠はないが、緊急事態宣言下の日本では、不要不急の外出を控えない人々がかなりいたようだ。京都では、まちの真ん中は確かに人氣が少なかったが、賀茂川の河川敷などでスケボー、サッカー、野球、ラクロスなどのスポーツをやっている人もいれば、ピクニックをしたりする若者などもたくさんいた。お店などではソーシャルディスタンスをあまり守っていなかった（今でもあまり守っていない）。どうも京都を見る限り、日本人はイギリス人ほど危機感を感じていなかったのではないか。強いて言えばイギリス人のほうが、配慮があつて「従順」であつたのかもしれない。

日本の感染者数も死者数も世界的にみると低い、その「なぜ」については専門家の間で意見が分かれている。日本人はマスクをよくするとか、キスやハグはあまりしないと、日本で流行っているウィルスは、欧米のそれほど強毒なものではないなどとの指摘もある。一方で、日本人は抵抗力を持つ遺伝子を獲得している、つまり人種による差異の可能性をほのめかす説もある。全く別の意味で、人種に重きをおく説は、麻生太郎財務大臣が提供している「民度」説である。財務大臣は、六月四日の参議院財政金融委員会での日本の致死率が低いことに触れ、こう述べた。

「お前らだけ薬持ってるのか」って、電話かかってきたときによく言われたもんでしたけ

ど、私どもとしては、そういった人たちの質問には、「おたくとうちの国とは、国民の民度のレベルが違うんだ」と言うと、みんな絶句して黙るんです。そうすると後の質問が来なくなるので、それが一番簡単な答えだと思って。

「民度のレベルが違う」とは、日本人が他のあらゆる国民よりも優れている、と言いたいのだろう。今求められているのは、解決に繋がらない感情的な文化論・人種論ではなく、科学的な根拠に基づいた研究や分析ではないかと思う。ともかく同じ島国で似たような対策をとってきたイギリスと日本の致死率がなぜあれだけ違うのかは謎のままである。

（国際日本文化研究センター教授）

- 1 <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/>
- 2 <https://www.worldometers.info/coronavirus/country/uk/>
- 3 https://www.worldometers.info/coronavirus/?utm_campaign=homeAdvegas1?%22%20%5C1%20%22countries
- 4 https://www.worldometers.info/coronavirus/?utm_campaign=homeAdvegas1?%22%20%5C1%20%22countries

小特集「パンデミックに思うこと」

メディア・プラットフォームとパンデミック

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス

今、私たちはパンデミックの経験から何を読み取るべきなのだろう。それは存在する幅広い研究分野において、何かを考え直す、またはすでに考えられた説を確認する機会を提供しているに違いない。このパンデミックが見せる一つの姿に、大衆文化の現在を考えるための手がある。近年、人気と影響力を拡大し続けてきた「メディア・プラットフォーム」もその一例である。

二〇二〇年三月一日、WHOによってパンデミックが宣言された。その段階で、メディアだけではなく、すでに日常生活の隅々にまで新型コロナウイルスへの懸念が浸透していた。私の場合、通勤電車の中でスペイン語と英語、日本語のニュースからその展開を追っていた。当初各国の状況によって、メディアが伝える危機感には温度差があった。例えばメキシコでは、COVID-19の死亡率は二〇一九年に三万四五八二人の死者を出した公式の殺人統計と対比され、パンデミックが軽視されたこともあった。ところが徐々に危機感が広がり、それは肌感覚でも感じられるようになった。満員だった京都線と神戸線ではだんだんマスク姿が増えていき、乗客の人数は次第に減少していった。

子供の時から見慣れているパニック映画の教育成果かもしれないが、パンデミックで溢れた混乱した情報から、不信感と希望や期待の緊張関係を軸にした分かりやすいストーリーのようなものも浮かび上がったように見えた。

しかし、そもそも新型コロナウイルスの出現のような自然界の出来事には意味はないはずだ。パンデミックは人類や社会の悪い行い（例えばこの文脈では、自然破壊を促進すると同時に、公的医療保険制度を放置してきた新自由主義の責任がよく取り上げられる）に対する一種の天罰という前近代的な考え方は、もはや通用しないはずだ。コロナを通して私たちに届けられているメッセージは、天あるいは自然界からのメッセージではなく、メディアからのものだろう。特に、自然界の出来事がニュースの中心になっている今のパンデミックの特徴は、ブルーノ・ラトゥールの『虚構の「近代」——科学人類学は警告する』（新評論、一九九一／二〇〇八年）の冒頭を連想させる。「コロナウイルス」を中心に、極めてローカルな出来事がグローバル規模の問題と直接的につながり、科学的なデータや仮説と政治的な言説、社会的あるいは経済的な解説と感情に訴える宣伝や宣言が混ざり合っている。

毎日限られた時間しかないのに、次々と情報が増える。この消化しきれない氾濫情報をどう読み取っているのかというと、実は読み取れていないということが指摘できるかもしれない。多くの場合、私たちはメディアが提供する情報そのものを受け止める前に、ニュースやストーリーの総体を構成する論理を読み取る段階にとどまっている。その論理というのは、矛盾に満ちているままの情報より単純で分かりやすいのである。一見、無秩序に混ざり合っているように見える自然科学的な問題と政治的・社会的な問題は毎日の展開において明確に切り分けられ、一貫性のあるストーリーとして再編成されているように見える。そう考えると、このス

トリーには「善と悪の戦い」を描くかのように、私たちの社会が直面する課題の姿がなぞられていとも言える。少なくともそういう側面もあると思う。

医師や看護師ら、私たちの命と日常を守ってくれる医療技術者、また統計や情報分析のエンジニアがいる。彼らの動機は明確であり、そして彼らのツールとなっているのは普遍的な科学的根拠を持つ明瞭な知識と技術である。彼らに対して期待と信頼が集中している。その一方、不信の中心になっているものもある。日本語、スペイン語、英語、どれを読んでも、不適切な対応と政策で疑われる政府と政治家、情報の隠蔽や陰謀論、科学的根拠のない噂、偏ったメディアまたは意図的あるいは無意識に混乱を広げる「無責任者」などがその例である。彼らの動機は不明瞭であり、かつその手段には科学的な信憑性が不足しているので不信感が募る。極端に単純化するなら、人そのものへの不信感があり、技術や科学は人の動機を通さないからこそ信頼性の根拠となり得る。

この信頼性の担保となる技術や科学的な知識という「非人間的なもの」に注目したい。なぜなら、人の動機の理解を必要としない「非人間的なもの」には、「メディア・プラットフォーム」と呼ばれているものと同じような論理が見られるからである。特に、「ソーシャル・ディスタンス」において求められる人と人の新しい「つながり」のあり方に関してそう言えると思う。

大衆文化の中で数年前から「メディア・プラットフォーム」と呼ばれるシステムやサービスが人気を集めてきた。何かを支える単なる土台という意味から、コミュニケーションと情報媒体技術においては特にその「プラットフォーム」こそが極めて重要な意味合いを持つようになった。YouTubeはその典型例であろう。二〇〇六年にYouTubeという動画投稿サイトが

Google に買収され、米国社会をはじめ大きな反響を及ぼすようになった。マグウィガンが指摘したように、同年に発行された『タイム』誌の「ネットでは、カメラがあれば誰でも歴史を変える力がある」(Jim McGuigan, *Cool Capitalism*, Pluto Press, 2009, p. 84) という記事の内容から読み取れるように、「集合知」や「参加型文化」と呼ばれていたインターネット上の無数のユーザーの自由表現活動には「文化の民衆化」の実現が期待された。

この当時から YouTube は自らそのサービスを「メディア・プラットフォーム」と定義していた。表現の自由と民衆の参加を連想させる政治的な意味合いを持っている「プラットフォーム」という言葉の選択は偶然ではなかったと思われる。二〇一〇年に Google がバイアコムという米国のメディア・コングロマリットに対して勝利した訴訟はそれをはっきりと示してくれた。YouTube はユーザーに単なる技術的なプラットフォームを提供しているだけなので、どのように利用されるかについての責任はなく、むしろ管理した場合、表現の自由が損なわれるので、プラットフォームとしての機能が阻害されるという論理が成り立つ。この論理には「メディア・プラットフォーム」という言葉に託された理念が窺われる。角度を変えてみれば、ユーザーの活動が信頼できない場合であっても、「プラットフォーム」という技術は信頼できると言える。

大衆文化においては、この「メディア・プラットフォーム」とその理念は、数年前から注目されていた「メディア・ミックス」と対比できる。「メディア・ミックス」は言葉通り、複数のメディアを活用しながら、特定の作品を展開させるものである。それに対して、「メディア・プラットフォーム」は、作品や文化商品のデジタル化とモバイル・インターネットの普及において、コミュニケーション機能を取り入れた形で、如何なる文化商品や作品であっても、誰も

が使える標準的なシステムに再編成するサービスであると言える。

この「メディア・プラットフォーム」も「メディア・ミックス」も、「つながり」をキーワードにしている。複数の文化商品、作品、メディアとサービス、そしてそのユーザーや消費者をつなぐ点において類似している。ある意味、この異質なもののつながりによって一種の包括的な総体を作っていると言える。ところが、「メディア・ミックス」と「メディア・プラットフォーム」の間には大きな違いがある。「メディア・ミックス」の場合は、複数のメディア媒体が想定され、媒体の多様性の中で、特定の作品や文化商品とそれらを求める消費者によって「つながり」が成り立つ。一方、「メディア・プラットフォーム」の場合はそれとは逆に、「メディア統合」と呼ばれるものにおいて、あらゆる文化商品や作品が「コンテンツ」として標準化される。ここでは、「つながり」を担保するのは人ではなく、誰でも使える「標準的なプラットフォーム」である。この仕組みにおいては、メディアをつなぐ消費者やユーザーの動機はますます不要になってくる。アルゴリズムであり、プラットフォームのアーキテクチャー（構造）であるため、人の動機を不要とする「つながり」のシステムへの期待が高まるように見える。

このように見るなら、「メディア・プラットフォーム」の論理と、パンデミックにおける人への不信任や技術や科学的な知識への期待感という論理の間には共通点が感じられる。

「現在我々が直面している「情報化するコミュニケーション」の問題を「プラットフォーム」の例から見ると「信頼性」の問題が見えてくる。社会には共通の価値観、世界観、または政治的な共同体など、他者同士の信頼性を担保する共有の基盤が必要とされている。インターネットの場合、多数の他者同志の相互作用は「プラットフォーム」と呼ばれているものによって担

保されている。プラットフォームを信頼すれば、他者を信頼しなくても、相互作用が可能になる。プラットフォームは便利な反面、コミュニケーションにおける「理解」を必要としない「つながり」は閉鎖空間のような「自分だけの現実」という「切断」を促進する側面もある。」（エルナンデス「趣味と表現活動——情報プラットフォームの社会学」『社会学（3STEP）』油井清光・白鳥義彦・梅村麦生編、昭和堂、二〇二〇年）と、今年の初め、コロナのことを意識し始める頃に書いた。

パンデミック以前から、「メディア・プラットフォーム」には信頼性の担保という役割が期待されていた。コロナウイルスが促進させた、人やその動機への不信任を背景に、そして「ソーシャル・ディスタンス」への要請においても、この役割がとても期待されている。つまり、プラットフォームは清潔な「つながり」で「ソーシャル・ディスタンス」を埋めてくれるのである。

（国際日本文化研究センタープロジェクト研究員）

——「疫病退散」についてのお守りたち——

アマビエからヨゲンノトリまで

小特集「パンデミックに思うこと」

姜 姍

二〇二〇年のCOVID-19の流行拡大は、世界を灰色に染めました。ウィルスの高い感染力と感染規模の大きさ、そして犠牲者数の拡大により、社会はパニックに陥りました。その上、外出自粛を余儀なくされ、通常の勤務や社会生活を送ることが出来なくなったことは、人々に更なる心理的打撃を与えました。この未曾有の事態に、江戸時代の瓦版アマビエが、日本国内で再度脚光を浴びることになりました。多くの商店や企業が、祈りを込めてアマビエの図柄を商品に印刷し、その愛らしい姿は、



図1 アマビエのお酒（本家松浦酒造の商品広告：<https://narutotai.jp/blog/?p=2596>）

てきました。日文研の図書館には、そういった想像性を表現した絵画資料が、たくさん所蔵されています。また、九州国立博物館所蔵の永禄一一（一五六八）年に書かれた『針聞書』にも、病氣の原因を説明するものとして「腹の虫」が描かれています。これらの資料は皆、目に見えない病氣の原因に対する日本人の豊かな想像力と、比喩的な芸術性を反映しています。

更には、妖怪に起因する病氣の鎮圧を、神に祈願する必要もありました。疫病、とりわけペストの爆発的感染が発生した時代、目に見えない脅威に直面した人々は、想像の世界で神の守護を求める他に、為す術がありませんでした。こういった守護神のほとんどは、人格化されたものでした。例えば、アジアで信仰されてきた神「鍾馗（ショウキ）」は、防災とお祓いを司



図2 歌川芳虎「麻疹後の養生」（日文研田
文庫所蔵）

人々の灰色に染まった生活を明るく照らす、一条の光となりました。

歴史上、世界のほとんどの地域が、小規模な感染症から、大規模なペストに至るまで、数々の疫病の恐怖を経験してきました。生物学によって病原体の認識が改められるまで、未知なる伝染病の神秘性は、人々の豊かな想像力を掻き立て

る神として広く認識されています。日文研図書館宗田文庫所蔵の、歌川芳虎が文久二（一八六二）年に描いた錦絵「麻疹後の養生」の左側には、鍾馗が描かれています。この鍾馗神は、麻疹の原因となった妖怪を征伐しています。この他にも、いくつかの非人格的な幻獣が守護神として生み出されました。

古今東西の文化には、疫病に関連すると考えられている幻獣が数多く存在しています。これら幻獣は、概ね自然界の動物を基にして生み出されたもので、種類も多く、陸、海、空の三種が揃っています。疫病の危険性は、予測不能で制御が困難であるため、疫病と幻獣の関係性は二種類に大別できます。一つは予知であり、もう一つは防衛です。予知を司る幻獣の物語は、一般的には、「その幻獣を見た時には疫病がまもなく発生する」というものです。よって人々は、この種の幻獣に感謝する一方で、恐れてもいました。そして、防衛を司る幻獣は、人間を感染から守るものと信じられ、この信仰からお守りが作られました。



図3 『新聞文庫・絵・肥後国海中の怪』（京都大学附属図書館所蔵）



図4 森元親「厄病除鬼面蟹写真」
(日文研所蔵)

レで立つイメージとして描かれました。(二) アマビエの話は次のように記録されています。

肥後国海中江毎夜光物出ル。所之役人行見るニ、づの如く者現ス。私ハ海中ニ住、アマビエト申者也。當年より六ヶ年之間、諸国豊作也。併、病流行、早々私ヲ写シ人々ニ見せ候得と申て、海中へ入けり。右ハ写シ役人より江戸江申来ル写也。

COVID-19の大流行を受けて、人々がアマビエのイメージを描き、その図柄が貼られた商品が販売されたことは、アマビエにあやかる商品として話題性があるとみなされたためと言えるでしょう。

水中のアマビエは疫病の予言者でありましたが、同じ水中に潜む「鬼面蟹」は、疫病を退散

今回のCOVID-19と最も関連している幻獣「アマビエ」は、幕末期に生まれたものです。長野栄俊の研究によると、年代の確認できる最古のアマビエの物語は、弘化三（一八四六）年四月中旬の摺物『肥後国海中の怪』に描かれています。アマビエは、長い髪と無毛の顔、独特な形の目と耳を持ち、胴体は鱗で覆われ、先が三つに割れた足また尾ビ



図5 『『暴瀉病流行日記』部分・
ヨゲンノトリ』(山梨県立
博物館所蔵)^(三)

させるものです。日文研の風俗図会データベースに、森光親が描いた「厄病除鬼面蟹写真」があります。この蟹は、高國を管領として担いだ浦上村宗の臣、畠村貴則が合戦に敗れて逆浪に身を投じた後、霊と化したもので、この蟹の殻を扉や窓に掛けると、疫病を取り除くことができると、とされました。

この度のCOVID-19の流行で脚光を浴びたもう一つの幻獣は、「予言の鳥(ヨゲンノトリ)」と呼ばれるものです。アマビエに比べ、ヨゲンノトリは少し遅れて出現しました。安政五(一八五八)年『暴瀉病流行日記』の記録によると、この鳥は安政四年一二月に加賀白山に出現し、このように告げました。

午年八九月の頃、世の人九分通死す。我姿を朝夕信仰する者は難を免ると豫言したりと云ふ。

アマビエとヨゲンノトリのいずれもが最初に疫病の発生を予言し、続いて信仰する者の救済と保護を約束しました。この二つの幻獣は、上述の予知と防衛の二種類の役割を、同時に担うお守りであったのです。



図6 東漢石画「扁鵲行医图」（曲阜孔子廟所蔵）

中国の場合は、多くの疫病に纏わる幻獣を『山海経』に見つけることができます。例えば、『山海経』の「東山経」には箴魚や潔鉤、蜚が見えます。また『山海経』の「中山経」には、跂踵と青耕、三足鳖や猿が確認できます。このうち、潔鉤と蜚、跂踵、さらに猿はすべて、目撃されるとすぐに疫病が発生するとされた予言的な幻獣です。潔鉤と跂踵は、予言の鳥として描かれています。青耕は特別な疫病を予防することができるとされたもので、とりわけ強い霊験を感じさせます。箴魚と三足鳖は水中に生息する幻獣で、これらを食べると疫病に感染することは無いとされました。ちなみに、三足鳖と後の江戸時代のアマビエは、どちらも三本足の水生動物です。偶然かもしれませんが、何らかの文化的な影響関係があったのかもしれない。

世界史の観点に立つと、鳥と疾病は非常に深淵な関係性を持っています。様々な文明で、鳥は病気の予言と治癒のシンボルと見なされています。山東省で発掘された東漢時代の石画に、「扁鵲行医图」があります。扁鵲様は古代中国の有名な医師で、この石画には彼の針灸治療のシーンが描かれています。興味深いことに、ここで扁鵲は、人間の頭と鳥の体を持った姿として描かれています。実際のところ、彼の名前、つまり「鵲」は、鳥を意味しています。この石画は、古代中国の鳥の図像が持つ治癒力への信仰を表現しています。

上記の予言と疫病予防の鳥のほか、『山海経』には、人間を災害から守るとされる鳥「鵩鵩（キイトウ）」が記されています。伝説によると、この鳥は「御凶（凶邪を斥ける力）」を持っています。寺島良安の『和漢三才図会』の中に、三つ頭の鵩鵩のイメージを見ることが出来ます。その後、韓国で流行した護符にも、三つ頭で一本足の鷹が描かれています。ちょうど、三つ頭の鵩鵩と片足の跂踵が組み合わさったようなものです。この背景には、何か面白い文化交流の歴史が隠されているかもしれません。

アジア以外にも、疫病に対する防御のシンボルとして鳥が使われている地域がたくさんあります。最も有名なのは、中世ヨーロッパで黒死病が発生した際に生まれた「ペスト医師」でしょう。治療に当たった医師は、自分を保護するために特別なマスクを着用しました。マスクの口と鼻の部位を、香料や葉草などで満たす必要があったので、鳥の嘴の形にマスクを製造しました。このマスクは徐々に、黒死病と大疫病の恐怖を表すシンボルとなりました。

技術の進歩の如何に関わらず、人間は、病気による苦難を完全に回避することはできません。突発的で大規模な感染症の拡大に対して、一般の民衆はおろか、科学者でさえも、自身の無力さを痛感し、絶望感に打ちひしがれることを免れません。世界の行く末は、あまりにも多くの未知数を含み、不確



図7 寺島良安『和漢三才図会』の「鵩鵩」（『東洋文庫』第44巻〔平凡社、1987年〕、347頁より）

実性に満ちています。「疫病退散」のお守りとなる様々な守護神や幻獣に関心を寄せることは、浮世を生きる人々の心の支えと慰めになっています。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、安井眞奈美日文研教授に資料や構成について御教示いただき、またローレンス・マルソー教授と稲田健一さんにも貴重なアドバイスをいただいたことに感謝します。

(北京大学ポストドクター／国際日本文化研究センター外来研究員)

注

- (一) 長野栄俊「予言獣アマビユ考―「海彦」をてがかりに」『若越郷土研究』第四九巻第二号、福島県郷土誌懇談会、二〇〇五年、一―三〇頁。
- (二) 飯島茂「山梨縣下に於ける安政五年の暴瀉病流行日記市川文書に就いて」『中外医事新報』一二二―二六、二八二頁。
- (三) 山梨県立博物館「かいじあむ」山梨県笛吹市御坂町成田 1501-1
URL:<http://www.museum.pref.yamanashi.jp>

小特集「パンデミックに思うこと」

「パンデミック」は何の予兆なのか？ ―身近な「悔い改め」への舵取りのために

稲 賀 繁 美

バブル崩壊後の人類慢心のつけ

右肩下がりの経済状況が三〇年以上続いてきた。社会構造そのものが大きく変質している。にもかかわらず霞が関や永田町、中央官庁や官邸周辺では、依然として経済成長を当然の前提とした施策・政策を維持してきた。原子力発電を含めたエネルギー政策や、国家予算も、特定の分野を除けば、依然として右肩下がりの設計図を変更できない。高度経済成長期のインフラが老朽化し、列島各地で更新が必要となってきた。その傍らで福祉予算を含む歳出は、人口構成の著しい少子高齢化もあって、鰻登りの上昇を見せている。慢性的赤字財政下、例外的な「特定」分野のひとつに、ほかならぬ研究教育分野がある。この二〇年ほど、運営交付金は毎年一％の割合で減少を続けてきた。この文教政策が早晚どこかで破綻を迎えることは、常識さえあれば予測できたはずだが、行政当局は責任を先送りすることで、いままで事態をやり過ぎしてきた。さらに、選挙結果の短期的な金銭的利益に執着する政治現場は、誰の目にも明らかな財政破綻の滝壺に向かう日本丸の進路変更に、必要な舵取りを図ることもできぬまま、目

先の利益にかまけて、目を瞑ってきた。

そうしたなかでのパンデミック騒ぎである。経営破綻に瀕して、一日も早くかつての日常への回帰を願う声も切実だが、反対にもはや二度と昨日の世界には戻れない、という諦めもまた顕著となってきた。端的にいうと、現下の事態は、短く見積もってもここ三〇年、いますこし長いスパンなら、ここ一〇〇年ほどの人類の文明史に、地球環境という名の自然が突き付けた、切実なる忠告ではなかったか。東日本大震災を「文明災」と捉えた梅原猛ならば、ここにより深刻なる第二幕を見たに違いない。事態は、およそ自然の猛威に対していかに人類の知恵がこれを克服・制圧するか、といった旧来の図式や人間優位の価値観では收拾できない。もとよりこの予測に「学術的な論証」など試みる用意はないが、人類の慢心と過剰なる傲慢さへの警鐘にも気づかない鈍感さが、未曾有の試練に直面している。

警鐘としての、恒常的な世界的感染蔓延

地球生態圏の表層を覆う移動手段の発達と、物資流通・金融経済の世界的な相互依存、さらには情報網に顕著な全球化の亢進。それがなにもたらすかの端的な提喻が自然界から齎された。このところ、ほぼ八年周期で人類を襲う、様々なウィルスの世界的蔓延は、人類が成し遂げた「進化」の陰画あるいは因果に他なるまい。にもかかわらずそうした世界的感染を撲滅しようとする姿勢は、端的にいうと、自然が我々に突き付けている貴重なる教訓を、読み間違えている。あなたたちが目指している世界、実現しようとしている現実はいかなるのですよ、と新型コロナ・ウィルスが告げている。それなのに、その現実から目を背け、その事実に見て見ぬふりを決め込むという逃避行動が、「もとの生活の回復」という願望に他なるまい。今後恒

常に、しかしその都度、予期不能なたちで繰り返し襲ってくるものが、確実な危機の、いたって柔和な予行演習の機会を与えられながら、それに気づかない愚昧を犯すならば、これは現世人類が後世に対して犯す致命的犯罪となろう。

いうまでもあるまい。こうした世界的感染の条件を怠りなく整え、やや大げさに言えば種の絶滅の危機までも準備したのは、ほかならぬ人類自身の知性にほかならない。水の惑星の表層をオブラートにも劣る脆弱な薄膜で覆っているに過ぎない生態系、海洋と大気を主成分とする循環系によって生存を保証されながら、その微妙な動的平衡を、一世紀足らずの短期で限界まで追い詰めるに至った人類。Homo sapiens は、大気汚染、核物質拡散さらには合成樹脂素材などの汚物の垂れ流しによって、地球誌において「人新世」という薄っぺらな地層年代を形成したのも束の間、いまや着実にその絶滅への過程を辿っている。謂うところの pandemic は、その野放図な「文明化の過程」の、偶発的な副作用などではなく、むしろ「本質」を、その下手人に対して容赦なく突きつける「凶星」ではなかったか。

人類文明史の折り返し点

政府諮問の専門家会議が、「新型ウィルスとともに生きるあらたな世界」を提起したことは、一定の見識を認めてよいだろう。健全への回帰は、もはや昨日の虚栄に戻ることはありえない。地球生態系の限界を見据え、可能な退路、失業が生活破綻を招かない社会を制度設計できるか否か。そこに、二一世紀中葉までの人類の残存にむけた企ての成否が掛かっている。これは誇張ではない。苟も「人間文化研究機構」を名乗る学術法人、「国際日本文化研究センター」を自負する機関であるなら、学術刷新の視野に立ち、社会構造の再編成・組み立て直し

に向けて、聊かなりとも有効な人文知の指針を示し、もとより微力ながら、できる範囲の社会貢献を果たすことが、設立の使命への忠誠の証とはいえないか。

事は、国家予算の組み換え、製造業の利潤拡大路線の廃棄、架空金融資本の暴走是正、観光飲食産業の回生、失業対策事業や福祉・医療体制の再設定など、社会万端に及ぶだろう。もはやいままでの社会常識は通用しない。三・一一の折同様、危機こそが好機を孕む。だが変革への契機は早急に失われる。惰性の日常への復帰は、状況をさらに悪化させる。もとより大言壮語の誇大妄想は、本意ではない。塊より始めよとの言葉に忠実でありたい。

*

①まず大型予算を獲得しての壮大なプロジェクト型打ち上げ花火は、もはや時代錯誤だろう。右肩上がりの発想の残滓だからだ。むしろ商業的な利潤とも無縁で、国家の財政援助の増額も期待できない低資産・低消費の下で、いかなる研究が裨益するのかの問い直しが不可欠となろう。航空機産業の莫大な浪費に利する国際的招聘や旅費負担は、今後もはや期待できない。電子通信網により、対面会議に代替する試みが、この間急速に進展した。行政の要請による煩瑣な委員会乱立も、緊急事態に際して最小限に抑える技法が急遽模索され始めた。あらたな国際的研究への日常の基礎を、そこに据え直すことが期待されよう。

②だが次に、ここで活用される電子通信網そのものが情報 pandemic を惹き起こしている事実も、看過できまい。悪性ウィルスが現在演じている生物学的な危機は、実際にはすでに電子情報の配信網において先行して慢性化しており、それは日常茶飯なサイバー攻撃などにより、仮想現実 virtual reality の真実を穿ち、猖獗を極めていく。ネット中毒という蜘蛛の巣に囚われた現代人は、無限の情報への access を得られるとの幻想と裏腹に、無明の窒息を日々経験

し、知的な人工呼吸器に縛り付けられている。電子機器の主人たるどころか、日常の業務の大半は、反対に電子機器の従僕となる隷属状態へと劣化を遂げている。

③となれば、電子機器や人工頭脳には任せられない領域の再評価と復権とが急務となろう。それは安易な神秘主義と結託した「東洋の復権」などとは無縁だが、しかし西欧近代の価値観が抑圧し、その視点からは、いわば座標軸上で直交しているために、認識のうえで盲点となり、数値計測から脱落してきた *hidden dimension* への探求に誘う。それは妄想ではなく、むしろ昨今の脳科学が垣間見始めた未知の領界に結び付く。仏教も含む身心修行には、この次元への豊かな経験が蓄積されている。だが従来の科学は、ともすればこの身心内奥に潜む次元を「論証不可能」を口実に、意図的に回避し、端から見下してきた。

④こうした視点は、学術や教育の再定義とも無縁でない。一方で電子機器による記憶の代替や *big data* 解析技術の進歩は、従来の教育で必須とされてきた頭脳による知識蓄積の意義を、根底から覆す。膨大な暗記を要求する現在の入試制度が、もはや時代錯誤な過去の遺物であることは、明白だろう。三〇歳までの年月を費やして体得した筈の学術技能も、明後日にはもはや不要で無益な残骸へと変貌を遂げる。となれば次の世代に贈与すべき知とは何なのか、今や、知の授受と教育の常識を原点から問い直すことが急務となっている。

⑤それは、産業界の需要を見越し、社会の要請に応ずる *computer literacy* の涵養、といった、近視眼的な目標とは、もとより次元を異にする。周囲が期待するところに忠実に、出来合いの模範解答に飛びつく如才なさが「秀才」の定義であるならば、今後期待される知の哲学は、そうした「秀才」像を裏切るだろう。それは従来の試験制度による学力評価の基礎を、社会的に無効として葬り去るだけの、抜本的変革への着手を、要求するだろう。

⑥科学技術の革新を牽引してきた価値観そのものの屋台骨が揺らいでいる。となればそうした技術革新に頼り、それを肯定する学術それ自体の有効性も、もはやそのまま認めるわけにはゆくまい。自然を技術によって征服するという人間存在の生態学的限界が、未知の疫病の世界的蔓延や、気候変動ほかの要因によって、白日の下に晒されている。人類がおめおめと滝壺へと呑み込まれないためには、発想の転換によって舵の向きを転じるほかあるまい。人類はおそらくは創造主によって、短命な指標化石に終わることを運命づけて設計された被造物だろう。なお五〇億年程度の寿命は見込まれる惑星・地球に人類後に出現するだろう知性に対して、恥じることなき屍と遺蹟とを残すことこそが、人類の果たすべき義務でもあろう。大袈裟でなく、人類の歴史は、今その準備の時を迎えている。

＊本稿は、筆者が本年度より研究代表者として実施する予定の最後の共同研究会「蜘蛛の巢上の無明…電子情報網生態系下の身心知の将来」にむけた準備的素描の一部をなす。

二〇二〇年五月一五日記

(国際日本文化研究センター教授)

共同研究

(二〇一九年四月一日～二〇二〇年三月三十一日)

〈重点共同研究〉

投企する古典性―視覚／大衆／現代

(研究代表者 荒木浩)

〔共同研究者名〕

稲賀繁美、石上阿希、呉座勇一、伊藤慎吾、ゴウラン
ガ・チャラン・プラダン、前川志織、グエン・ヴァー・ク
イン・ニュー、ケラー・キンブロー、李銘敬、虞雪健、
石原知明、李杰玲、李市竣、飯倉洋一、上野友愛、岡
田圭介、河東仁、恋田知子、河野貴美子、河野至恩、
合山林太郎、齋藤真麻理、竹村信治、中野貴文、中前
正志、野網摩利子、三戸信恵、箕浦尚美、山本陽子、
渡部泰明、渡辺麻里子、深谷大、屋良健一郎、平野多
恵、徳永誓子、土田耕督、エドアルド・ジェルリーニ、

松平莉奈、板坂則子、ガリア・トドロヴァ・ペトコヴァ

〔海外共同研究員名〕

楊曉捷、山藤夏郎、李愛淑、金容儀、マラル・アング

ソヴァ

〔研究発表〕

〈第一六回研究会〉

二〇一九年九月二八日

仲町六絵(ゲストスピーカー)「キャラクター小説から古

典への応答 ―小野篁と安倍晴明を主人公に―」

中村明一(ゲストスピーカー)「日本音楽の構造」

二〇一九年九月二九日

松平莉奈「古典を絵にする」

〈第一七回研究会〉

二〇二〇年二月一日

グエン・ヴー・クイン・ニュー「日本の教科書に見る俳句学」

李市竣「『狐女房譚』の変容―古典文献資料から昔話へ―」

二〇二〇年二月二日

井黒佳穂子（ゲストスピーカー）『『稚児之草紙』の成立―本文の和歌引用をめぐる―』

「運動」としての大衆文化

（研究代表者 大塚英志）

〔共同研究者名〕

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス、山本忠宏、前川志織、伊藤慎吾、板倉史明、内田力、菊地暁、神松一三、近藤和都、嵯峨景子、佐野明子、杉本仁、鈴木麻記、鈴木洋仁、團康晃、鶴見太郎、石田美紀、萩原由加里、ビヨン・オーレ・カム、藤岡洋、牧野守、松井広志、室井康成、雑賀忠宏、竹村民郎、川松あかり、藤嶋陽子、執行治平、花田史彦、香川雅信、横田尚美、谷島貫太、滝浪佑紀、櫻木千恵、北浦寛之、川口典成

〔海外共同研究員名〕

浅野龍哉、蔡錦佳、斉夢菲、秦剛、マーク・スタインバーク、金日林、エドモン・エルネスト・ディ・アルボン、宣政佑

〔研究発表〕

〈第七回研究会〉

二〇一九年八月三十一日

鶴見太郎「運動としてみる民俗学の組織化」

鈴木麻記『『漫画史』形成の場―清水勲と川崎市市民

ミュージアムに注目して―

近藤和都「アニメ文化と再放送―『機動戦士ガンダム』

をめぐる視聴者運動を中心に―

鈴木洋仁「哲学と塾のあいだ―日本思想における長谷川

宏の「運動」―

〈第八回研究会〉

二〇一九年二月一四日

北浦寛之「イギリス・ノリッジの日本文化と研究―セイ

ンズベリー日本藝術研究所での研究活動をもとに―

伊藤慎吾「現代エンターテインメント小説におけるモンス

ターの和洋混淆」

小野塚佳代「戦中のオーストラリアと日本の漫画の比較」
王琮海「戦時下アニメーションにおける音声と画面を配

合する手法——中日の差異とその背後の思想的条件」

二〇一九年二月一日

トーマス・ラマール「メディアとしての妖怪」

アルバロ・ダビド・エルナンデス・エルナンデス「メキシ

コ漫画イストリエタにおけるホラーの表現」

大塚英志「妖怪・変身・アヴァンギャルド」

コメンテーター…伊藤慎吾

〈第九回研究会〉

二〇二〇年二月八日

神松一三「正力松太郎の事業とその独自性の研究」

佐野明子「日本におけるディズニーの受容と展開…劇場

パンフレットおよび映像分析」

マリア・デル・カルメン・バエナ「マンフラと日本のパン

ドデシネ」

二〇二〇年二月九日

宣政佑「純情漫画データベースの製作と日本少女漫画」

孫旻喬「変身する「人造人間」——一九二〇年代の日本

における「人造人間」の受容と表象」

大塚英志「市川綱二文書と上海映画工作」

音と聴覚の文化史

〔研究代表者 細川周平〕

〔共同研究者名〕

光平 有希、中原ゆかり、青嶋絢、秋吉康晴、宇都宮聖
子、岡崎峻、奥中康人、柿沼敏江、葛西周、春日聡、
金子智太郎、久保田晃弘、齋藤桂、城一裕、谷口文和、
土田牧子、辻本香子、中川克志、長崎励朗、昼間賢、
福田裕大、福田貴成、細馬宏通、横井一江、吉田寛、
輪島裕介、渡辺裕、長門洋平、越智朝芳、福永健一、

瀬野 豪志

〔海外共同研究員名〕

キャロライン・S・ステイブンス、山内文登、阿部万
里江

〔研究発表〕

〈第一一回研究会〉

二〇一九年五月一日

瀬野 豪志「『イヤフォン』の文化史 ―『聴力』『測定』『補
聴器』」

福永健一「拡声という声の営みの歴史…その技術史と文

化史」

キャロライン・S・ステイブンス「Sound control in Japan」

二〇一九年五月一九日

中原ゆかり「小口大八と太鼓の音」

斎藤桂「箏曲家の聴覚エッセイ…鈴木鼓村『耳の趣味』

(一九一三)を読む」

〈第二二回研究会〉

二〇一九年一〇月二六日

伊藤亜紗(ゲストスピーカー)「吃音者の耳とろう者の声…

「聞く」と「話す」のあいだで」

福田貴成「音を見る」ことの系譜…一九世紀の両耳聴実

験からサウンド・アートまで」

映画『リッスン』上映

二〇一九年一〇月二七日

映画『リッスン』をめぐる談話会

長門洋平「視聴覚メディアにおける「物語世界の音 diegetic sound」」

渡辺裕「音響学者・田口柳三郎と「耳の戦争」」

〈第一三回研究会〉

二〇二〇年三月一四日

梅大也(ゲストスピーカー)「《赤とんぼ》の戦後―表象の山田耕筈試論」

柳沢英輔(ゲストスピーカー)「フィールドレコーディン

グの実践を通じた音響民族誌の可能性」

金子智太郎「市民による音づくり——荻昌弘のオーディオ批評」

二〇二〇年三月一五日

辻本香子「アジアの市街地における芸能／スポーツとしての龍舞映画 再論」

横井一江「オフサイトの脱神話化―オフサイト、オンサイト」

青嶋絢「サイトスペシフィック・アートと音の表現―

八〇―九〇年代の芸術祭・アートプロジェクト史から迫る」

細川周平「昭和初期の騒音低減運動」

応永・永享期文化論―「北山文化」「東山文化」という大衆的歴史観のはざままで―

〔研究代表者〕大橋直義、呉座勇一

〔共同研究者名〕

伊藤慎吾、高橋悠介、橋本正俊、猪瀬千尋、今枝杏子、大河内智之、川口成人、川本慎自、小助川元太、小山順子、坂本亮太、重田みち、谷口雄太、貫井裕恵、山田徹、芳澤元、大澤絢子

〔海外共同研究員名〕

亀田俊和

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一九年六月一五日

大橋直義『『三国伝記』における寺社縁起』

二〇一九年六月一六日

重田みち「世阿弥と一条兼良の交流の可能性―足利義持政権期における中国古典の学問・受容に関する考察の一環として―」

大澤絢子（ゲストスピーカー）「親鸞伝の中世的展開」
〈第六回研究会〉

〔所外開催 東京大学史料編纂所〕

二〇一九年九月二八日

太田亨（ゲストスピーカー）「日本中世禅林における中国文学受容について―応永年間を中心に―」

五月女肇志（ゲストスピーカー）「応永年間の今川了俊―歌論書を中心に―」

石原比伊呂（ゲストスピーカー）「足利將軍家の規範先例―「義満型」と「義持型」なる二類型と応永という時代―」

二〇一九年九月二九日

白井和樹（ゲストスピーカー）「元号「応永」考―一四五世紀の改元における位置づけ―」

中嶋謙昌（ゲストスピーカー）「応永三〇年前後の能と演者」

山本啓介（ゲストスピーカー）「足利義持文化圏の和歌・連歌」

〈第七回研究会〉

二〇一九年一二月一四日

橋本正俊『『三国伝記』の「今」を考える」
小助川元太『『堪囊鈔』と『三国伝記』』

赤澤 春彦（ゲストスピーカー）「室町期の陰陽道・陰陽師」

大衆文化と文明開化…幕末から明治への激動期における大衆メディアの位置及び役割

〔研究代表者 アリスティア・スウェール〕

〔共同研究者名〕

瀧井 一博、細川周平、ジョン・ブリーン、古川綾子、石上阿希、西山由理花、サイモン・パートナー、松田宏一郎、土屋礼子、五百旗頭薫、菅原真弓、百瀬響、大久保健晴、アレキサンダー・ベネット、岡本貴久子、土谷桃子、奈良岡聰智、森岡優紀

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一九年九月七日

アリスティア・スウェール「今後の研究会の運営方針について」

て」

二〇一九年九月八日

菅原 真弓『月岡芳年伝 幕末明治のはざまに』（中央公論

美術出版、二〇一八年）を読む

評者…石上阿希

筆者からの応答とディスカッション…菅原 真弓

〈第二回研究会〉

二〇一九年十一月一六日

百瀬 響『文明開化・失われた風俗』（吉川弘文館、

二〇〇八年）を読む

評者…アリスティア・スウェール

筆者からの応答とディスカッション…百瀬 響

二〇一九年十一月一七日

土屋 礼子「明治初期の小新聞と政党機関紙」

瀧井 一博「知識交換と博覧会―大久保利通の殖産興業」

〈第三回研究会〉

二〇二〇年二月二日

松田 宏一郎「徂徠学と「風雅」の人心的効用」

土谷 桃子「江戸と明治を生きた戯作者 山々亭有人こと

条野採菊」

二〇二〇年二月三日

岡本 貴久子「大日本山林会の近代博覧会事業に向けたま

なざし―「山」の見せ方一考」

アレキサンダー・ベネット「明治期の剣道教育と武道の大

衆化」

〈第四回研究会〉

二〇二〇年三月一四日

西野 亮太「鈴木経勲の『南洋探検実記』（一八九二）…敗

者復活戦としての自己演出？」

サイモン・パートナー「幕末時代紀州藩におけるニュース

と情報の流通…小梅日記を例にして」

二〇二〇年三月一五日

森岡 優紀「明治初期の伝記の変容とメディア」

アリスティア・スウェール「明治憲法発布以降の東京デカダ

ン—若干の考察」

マス・メディアの中の芸術家像

（研究代表者 松井茂、坪井秀人）

〔共同研究者名〕

前田 真二郎、伊村 靖子、佐藤 知久、原 久子、中西 博之、

川崎 弘二、長 寛 寛幸、外山 紀久子、藤井 貞和、鈴木 勝

雄、渡部 葉子、本間 友、服部 真吏、岡田 暁生

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一九年五月一三日

松井 茂「マス・メディアの中の芸術家像」

坪井 秀人「本共同研究会の基本的考え方」

二〇一九年五月一四日

川崎 弘二「マス・メディアの中の芸術家像 作曲家・坂

本龍一と武満徹の場合」

坂本 龍一（ゲストスピーカー）「インタビュ…

一九八四・一九八五・一九八六の東京での活動をめぐ

って」

〈第二回研究会〉

二〇一九年七月一四日

川崎 弘二「一九八四・八五年の坂本龍一のメディア・パ

フォーマンス」

松井 茂「出版のパフォーマンス 坂本龍一の音楽外的思

考」

二〇一九年七月一五日

長 寛 寛幸「機材テクノロジーの変遷から考察する sync と

async」

佐藤 知久「ポストモダニズム、あるいは資本主義リアリ

ズムの予兆としての一九八〇年代中期について」

〈第三回研究会〉

二〇一九年九月二十九日

松井茂「出版のパフォーマンス 坂本龍一の音楽外的思考／磯崎新の建築外的思考二」

鈴木勝雄「水牛楽団の活動とアジア——文化を通じた連帯の夢」

二〇一九年九月三〇日

松井茂「二十九日の総括と本日のプログラムへの接続」

服部真吏「磯崎新をめぐる」

佐藤知久「浅田彰をめぐる」

〈第四回研究会〉

〈所外開催 情報科学芸術大学院大学〉

二〇一九年十二月二十六日

前田真二郎「ヴィデオと自作をめぐる」

ケン・ヨシダ（ゲストスピーカー）「マス・メディアの中の芸術家と批評をめぐる」

坪井秀人「ストリート文化のなかの寺山修司」

二〇一九年十二月二十七日

松井茂「『マスメディアの中の芸術家像』のこれまでとこれから」

藤井貞和、坪井秀人「湾岸戦争論とはなんだったの

か？」

〈第五回研究会〉

二〇二〇年二月九日

ラウンドテーブル「湾岸戦争詩論争とは何だったのか」

坪井秀人「湾岸戦争論の射程」

藤井貞和「瀬尾育生と湾岸戦争論」

瀬尾育生（ゲストスピーカー）「湾岸戦争論」をめぐる

二〇二〇年二月一〇日

松井茂「研究会の総括と今後の展望」

伊村靖子「無印良品の成り立ちを通して考える、アートとデザインの間」

〈国際共同研究〉

差別から見た日本宗教史再考——社寺と王権に見られる聖と賤の論理

（研究代表者 磯前順一、吉村智博）

〔共同研究者名〕

鈴木岩弓、鍾以江、小田龍哉、アンナ・ドゥーリナ、藤本憲正、孫江、佐藤弘夫、小倉慈司、鈴木英生、川村寛文、山本昭宏、青野正明、菊田真司、船田淳一、太

田恭治、浅居明彦、佐々田悠、寺戸淳子、金沢豊、西宮秀紀、井上智勝、舟橋健太、鶴見晃、河井信吉、上村静、安部智海、竹本了悟、守中高明、関口寛、岩谷彩子、久保田浩、吉田一彦、林政佑、大村一真、戸城三千代、大林浩治、山田忍良、里見喜生、荻原稔、中村平、打本和音

〔海外共同研究員名〕

トモエ・イレネ・M・シュタイネック、ラジ・C・シュタイネック、ランジャナ・ムコバディヤーヤ、ダニエル・ボツマン、酒井直樹、和氣直子、尹海東、呉佩珍、片岡耕平、ヒトミ・トノムラ、ガルミッシュ・フロランス、平野克弥

〔研究発表〕

〈第一六回研究会〉

二〇一九年六月一日

川村覚文「情動的存在と国民的主体性——現代の統治性」と主権について」

上村静「ディアスポラと国民国家——「ユダヤ人」であること」

吉村智博「摂津役人村（渡辺村）の存立構造」

〈第一七回研究会〉

二〇一九年七月二七日

大村一真「公共空間と「聖なるもの」——公共空間における包摂と排除を論じる一視角」

関口寛「日本近代の人種主義・差別・統治性——部落問題の成立をめぐる」

西宮秀紀「浪速神社と坐摩神社」

寺戸淳子「ヘラルシュ」共同体運動の「リアリズム」——

「健常者」ではないこと (a-normal, extra-ordinary)」

〈第一八回研究会〉

二〇一九年九月二一日

（所外開催 國學院大學渋谷キャンパス）

佐藤弘夫「穢れを嫌う神——差別の発生と深化の構造」

舟橋健太「被差別／非差別の主張とカースト制度——「不可触民」であること、インド人であること」

青野 正明「在日コリアンについて」

國學院大學博物館見学

〈第一九回研究会〉

二〇一九年十一月九日

片岡耕平「犬神人・芸能民・遊女」

岩谷 彩子「離散の歴史を生きるということ——ヨーロッパ

パのロマにみられる空虚 (void) 表象・過剰の表出」

鈴木 岩弓「民間信仰にみる差別の問題——出雲の狐持ち」

山本 昭宏「水俣病者と原発被災者差別」

〈第二〇回研究会〉

二〇一九年二月一日

井上 智勝「奥羽の「神職人」について——近世の神祇奉仕者をめぐる聖と賤——」

平野 克弥「天皇の赤子」——アイヌモシリの収奪と保護の論理——

菊田 真司「近代」・「公共性」・「差別」

吉田 一彦「本願寺と被差別民——親鸞系諸門流の聖徳太

子信仰をてがかりに」

身体イメージの想像と展開——医療・美術・民間信仰の狭間で

(研究代表者 安井 眞奈美、ローレンス・マルソー)

〔共同研究者名〕

木場 貴俊、石上 阿希、井上 章一、古川 綾子、前川 志織、

山田 奨治、杉田 智美、坂 知尋、光平 有希、板坂 則子、

中本 剛二、相田 満、蘆田 宏、今井 秀和、遠藤 誠之、越

智 秀一、川橋 範子、木森 圭一郎、倉田 誠、桑原 牧子、

香西 豊子、鈴木 則子、鈴木 由利子、高橋 淑子、田里 千

代、波平 恵美子、松岡 悦子、宮崎 康子、エドワード・ド

ロット

〔海外共同研究員名〕

金 容儀、魯 成煥

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一九年五月二五日

越智 秀一「境界としての身体——外邪・妖異と内なる神々の交錯するトポス」

坂 知尋「三途の川の蜃と救済・現世利益の女神——視覚的

特徴の解釈から考察する奪衣婆の性格の展開」

二〇一九年五月二六日

松岡 悦子「出産に見られる身体の諸相——医療・資本主

義・女性の主体性」

〈第六回研究会〉

二〇一九年七月六日

蘆田 宏「身体と視覚——視覚による自己運動感覚と姿勢制

御について」

安井 眞奈美、ローレンス・マルソー「共同研究会の成果

報告書と企画展示、今後について」

光平 有希「日文研宗田文庫図版資料について」

二〇一九年七月七日

井上 章一「禪の日本」

〈第七回研究会〉

二〇一九年九月二八日

安井 眞奈美「今後の発表と成果報告について」

ゼンタイ・ユディット「江戸時代を中心とした日本眼科医

療史」

パップ・メリンダ「日本の通過儀礼における身体とそのシ

ンボリズム」

二〇一九年九月二九日

倉田 誠「認知症のイメージ」

〈第八回研究会〉

二〇一九年十一月九日

安井 眞奈美「成果報告について」

ローレンス・マルソー「形と機能 近世日本の絵入文学に

おける身体像小考」

アンナ・アンドレーワ「前近代東アジアと中世日本におけ

る胎内学思想と性別の占い」

二〇一九年十一月一〇日

アストギク・ホワニシャン「性と生殖をめぐる政治…戦後

日本の場合」

東アジアにおける哲学の生成と展開―間文化の視点から

〔研究代表者 廖 欽彬〕

〔共同研究者名〕

伊東 貴之、稲賀 繁美、劉建輝、中島隆博、谷 徹、石井

剛、杉村 靖彦、小倉 紀蔵、上原 麻有子、志野 好伸、浜

渦 辰二、植村 和秀、合田 正人、藤田 正勝、井川 義次、

嶺 秀樹、安部 浩、景山 洋平、太田 裕信、竹花 洋佑、秋

富 克哉、出口 康夫、植村 玄輝、ダリシエ・ミシエル、亀

井 大輔、佐藤 将之

〔海外共同研究員名〕

王 青、呉 偉明、張 政遠

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一九年十一月二四日

藤田 正勝「田辺元とハイデッガー」

浜渦辰二「日本におけるフッサル現象学の受容」

ダリシエ・ミシエル（ゲストスピーカー）「The Particide

（尊属殺人）」

中島隆博「日本における老荘思想の近代的受容」

井川義次「中国哲学情報のヨーロッパにおける解釈と受

容―間文化の視点から―」

廖欽彬「三木清とハイデッガー」

近代東アジア文化史の再構築Ⅰ―19世紀の百年間を中心に

（研究代表者 劉建輝）

〔共同研究者名〕

井上章一、石川肇、孫江、宋琦、唐樞、上垣外憲一、

陳力衛、王宝平、小倉紀蔵、白幡洋三郎、单援朝、陳

継東、仲万美子、松宮貴之、森田憲司

〔海外共同研究員名〕

王中忱、劉序楓

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一九年八月二日

劉建輝「近代東アジアモダンロードの成立―出島史観へ

の批判を兼ねて」

帝国のはざまを生きる―帝国日本と東アジアにおける移民・旅行と文化表象

（研究代表者 蘭信三、松田利彦）

〔共同研究者名〕

劉建輝、单荷君、高燕文、中山大将、権香淑、野入直

美、八尾祥平、李洪章、石川亮太、原佑介、木下昭

長沢一恵、深尾葉子、坂部晶子、高媛、塚瀬進、丁智

恵、福本拓、松平けあき、孫嘉睿、上田貴子、ニコラ

ス・ランブレクト

〔海外共同研究員名〕

張嵐、朴裕河、陳姪媛、李正熙

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一九年五月一日

蘭信三「共同研究「帝国の狭間を生きる」の意義と今後

の計画」

木下昭「コンタクト・ゾーンとしての「日本語教室」…

フィリピンをめぐる帝国支配の記憶」

八尾 祥平「台湾と沖繩を生きる——一九七〇年引揚者のライフストーリーを中心として」

〈第二回研究会〉

二〇一九年七月一日

高 燕文「和田傳が見た『滿蒙開拓』——『滿洲』現地へのまなざし」

原 佑介「帝国のはざま、植民地の『密室』で出会う——日本人作家が描いた三・一独立運動を手がかりに」

丁智恵「一九六〇年代日本の映像メディアに現れた『愛』

と『友情』の物語——日韓基本条約と置き去りにされた植民地責任」

松田 利彦「在日韓国人李栄根と『統一朝鮮新聞』における民族統一運動——一九五〇年代末〜一九六〇年代——」

松平 けあき「朝鮮戦争における『日系アメリカ人』——

マイノリティとしての従軍経験」

〈第三回研究会〉

二〇一九年九月二一日

合評会Ⅰ「原佑介『禁じられた郷愁』」

評者・安志那（ゲストスピーカー）、ニコラス・ランブルクト

塚瀬 進「マンチュリアにおける旗人、滿洲人（満人）、滿洲族（満族）」

陳 延媛「一九一〇年代台湾における娼妓稼業契約の公証義務化とその廃止」

コメンテーター・上田 貴子

合評会Ⅱ「中山大将『サハリン残留日本人と戦後日本』」

評者・高希麗（ゲストスピーカー）、野入直美

〈基幹共同研究〉

比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想——王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼——

（研究代表者 伊東 貴之）

〔共同研究者名〕

倉本一宏、井上章一、瀧井一博、ジョン・グリーン、松田 利彦、劉建輝、榎本 渉、フレデリック・クレインス、マルクス・リュッターマン、青木隆、新井菜穂子、井上厚史、恩田裕正、垣内景子、荻部直、橋川智昭、権純哲、小島毅、佐野真由子、関智英、末木文美士、銭国紅、竹村英二、竹村民郎、田尻祐一郎、土田健次郎、永富青地、西澤治彦、長谷部英一、林文孝、松下道信、

水口拓寿、横手裕、李梁、吾妻重二、新田元規、石井剛、伊藤聡、井ノ口哲也、内山直樹、遠藤基郎、大久保良峻、黒岩高、岸本美緒、児島恭子、近藤成一、佐々木愛、杉山清彦、高柳信夫、葭森健介、保立道久、李曉東、本間次彦、松野敏之、石川洋、澤井啓一、渡邊義浩、前田勉、渡辺美季、中純夫、古勝隆一、茂木敏夫、重田みち、周圓、田口由香、豊田裕章、山村奨

〔海外共同研究員名〕

張啓雄、葛兆光、手島崇裕、ベンジャミン・A・エルマン

〔研究発表〕

〈第一五回研究会〉

二〇一九年八月四日

佐々木愛「『父子同気』と中国家族法の原理」

権純哲「高橋亨の京城帝国大学『朝鮮思想史』／朝鮮儒學

史」講義ノートの翻刻を終えて」

野村玄（ゲストスピーカー）「元禄一六年一二月の七社七

寺祈祷・内侍所御神楽と徳川綱吉―天皇と将軍に「宗

教的機能」とその相剋は存在したのか―」

二〇一九年八月五日

李曉東「立憲の中国的論理」

荻部直「『國體』と主権論」

〈第一六回研究会〉

二〇一九年九月二日

松下道信「『新道教』を越えて―全真教の新たな位置付けの試み―」

上川通夫（ゲストスピーカー）「日本中世仏教と民衆思想

―ユーラシア・東アジア・列島諸地域―」

岩本憲司（ゲストスピーカー）「公羊傳注の虚字解釋」

〈第一七回研究会〉

（所外開催 国士館大学文学部）

二〇一九年十一月九日

楠本文庫閲覧

手島崇裕「入宋僧の在中活動はどう描写されてきたか―

入宋当事者の言説から近現代まで」

李梁「新文化運動の一側面―近代中、西洋医学論争をめ

ぐって―」

竹村民郎「石原莞爾と満洲協和会―王道主義に関連して

―」

二〇一九年十一月一〇日

茂木敏夫「普遍と特殊―近現代東アジアにおける秩序

構想の語り方

児島恭子「未熟の王権―王国をつくらなかった東アジアの周縁民族・アイヌの場合から『王権』を考える―」
田口由香「幕末期イギリスから見た日本の天皇・將軍・大名」

多文化間交渉における『あいだ』の研究

〔研究代表者 稲賀繁美〕

〔共同研究者名〕

石川肇、榎本渉、片岡真伊、君島彩子、フレデリック・クレインス、杉田智美、春藤献一、根川幸男、古川綾子、セシル・ラリ、飯窪秀樹、白石恵理、陳イジエ、二村淳子、倉田健太、今泉宜子、鶴戸聡、江口久美、大西宏志、岡本光博、小川さやか、隠岐さや香、小倉紀蔵、金子務、九里文子、鞍田崇、近藤高弘、申昌浩、鈴木洋仁、莊千慧、滝澤修身、武内恵美子、竹村民郎、多田伊織、千葉慶、テレングト・アイトル、戸矢理衣奈、中村和恵、長門洋平、西原大輔、朴美貞、橋本順光、林久美子、林洋子、平松秀樹、平芳幸浩、藤原貞朗、ヘレナ・チャプコヴァー、堀まどか、松嶋健、三原

芳秋、宮崎康子、村中由美子、森洋久、マシュー・ラーキング、山本麻友美、郭南燕

〔海外共同研究員名〕

デンニツァ・ガブラコヴァ、近藤貴子、ミツヨ・デルクルーイトナガ、新井菜穂子

〈第一五回研究会〉

二〇二〇年二月一六日

寺本学（ゲストスピーカー）「パリでの〈間〉展

（一九七八）.. 歴史的検討」（仮題）

倉田健太「祭礼の管理と喧嘩を巡る言説の変容―新居浜太鼓祭りの会場化をてがかりに―」

二〇二〇年二月一七日

铸件美佳「稽古型の身体論」

近代東アジアの風俗史

〔研究代表者 井上章一、斎藤光〕

〔共同研究者名〕

劉建輝、石川肇、安井眞奈美、唐権、官文娜、申昌浩、永井良和、西村大志、濱田陽、李珣淑、嘉本伊都子、加藤政洋、崔吉城、矢原章、川井ゆう、岩井茂樹、

井上雅人、長田俊樹、木村立哉、仲万美子、橋爪節也、
北浦寛之、土居浩、劉玲芳

〔研究発表〕

〈第八回研究会〉

二〇一九年六月一日

岩井茂樹「『笑う写真』の誕生」

劉玲芳「アジアにおける『学生服』——日本学校の制服か
ら中山装へ」

二〇一九年六月二日

唐権「来船清人について——近世中日文化交流再考」

石川肇「甲斐莊楠音と京都の時代劇映画」

〈第九回研究会〉

二〇一九年九月二日

崔吉城「セクシー性と美の文化人類学」

井上雅人「上スハ（諏訪）の一九一八年」

二〇一九年九月三日

官文娜「日本における都市の近代化と共同体の再構成——
神仏習合と行事の役割」

申昌浩「東アジアの『日傘』研究・中国編——上海・北京
の雑誌でみる新女性と日傘 一九二五／一九四五」

〈第一〇回研究会〉

二〇一九年十二月二日

西村大志「『色彩』の風俗——靴下をめぐる」

川井ゆう「等身大人形の風俗史」

二〇一九年十二月二日

永井良和「ダンスホールの『植民地』——日本の西洋化と
日本をとおした西洋化」

斎藤光「東アジアの『カフェー』や『カフェー関連文化現
象』をいかに捉え比較・分析・記述していけるか？」

〈第一一回研究会〉

（所外開催 京都精華大学流溪館）

二〇二〇年三月七日

矢原章「近代（二五〇年）の資料総合では絵葉書が一番
である」

嘉本伊都子「写真花嫁の花嫁衣装をめぐる一考察」

二〇二〇年三月八日

井上章一「土足はどこまでゆるされるのか」

井上章一「近代の風俗史、西洋化の情勢をめぐる、ささ
やかな理論的展望、あるいは脱理論的展望、および、
成果出版にむけての提案」

「かのように」という原理で形成してきた文通―「文書」概念や、その様式、記号、表象、意図性

〔研究代表者〕 マルクス・リュッターマン

〔共同研究者名〕

荒木浩、榎本渉、磯前順一、廣田浩治、梶谷真司、金泰虎、小島道裕、宮原一成、森洋久、小口雅史、岡崎敦、高橋一樹、ウィッターン・クリスティアン

〔海外共同研究員名〕

ミハエル・キンスキー、イエルク・クウェンサー

〈第四回研究会〉

二〇一九年六月八日

廣田浩治「中世荘園と領主の『文書』授受をめぐる―戦国公家の在荘支配記録『政基公旅引付』などから―」

二〇一九年六月九日

史料を読む「守覚法親王伝『消息耳底秘抄』〔『群書類衆』第九巻〕」

〈第五回研究会〉

二〇一九年一〇月一九日

森洋久「情報とは何か。その概念と現象の基礎論―物理

学史を中心に―」

二〇一九年一〇月二〇日

討論「情報学の提唱を受けて」

縮小社会の文化創造…個・ネットワーク・資本・制度の観点から

〔研究代表者〕 山田奨治

〔共同研究者名〕

松田利彦、田村美由紀、佐野真由子、谷川建司、大石真澄、小川さやか、荻野幸太郎、太下義之、沢田眉香子、服部圭郎、服部正、松村圭一郎、三脇康生、山本泰三、吉澤弥生、吉村和真、山下典子、木村智哉、伊藤遊

〔海外共同研究員名〕

玉野井麻利子

〈第一回研究会〉

二〇一九年七月二七日

山田奨治「研究会のねらい」

服部正「アール・ブリュット、共生という名の分断」

〈第二回研究会〉

二〇一九年九月二八日

吉澤 弥生「公的文化事業における労働問題」

荻野 幸太郎『『エロ漫画表現史』『全国版あの日のエロ本

自販機探訪記』有害図書指定問題の「論点化」と、その後の展開」

〈第三回研究会〉

二〇一九年十二月二一日

田村 美由紀「現代小説にみる〈ケア〉の諸相」

吉村 和真「マンガのバリアフリーについて考える」

〈第四回研究会〉

二〇二〇年三月一四日

松村 圭一郎「縮小社会の「地方」における大学教育と地

域社会」

小川 さやか「『リープフロッグ』現象という理解を超えて

——タンザニアと日本を横断するシェアの論理」

文明としてのスポーツ／文化としてのスポーツ

（研究代表者 牛村 圭）

〔共同研究者名〕

フレデリック・クレインス、稲賀繁美、劉建輝、ジョ

ン・ブリン、光平 有希、西山 由理花、倉田 健太、田
村 美由紀、増田 斎、井上 章一、古田 島洋介、藤田 大誠、
川 島 浩平、佐伯 順子、佐々木 浩雄、高嶋 航、竹村 民郎、
等松 春夫、永井 久美子、堀まどか、吉江 弘和

〔海外共同研究員名〕

徐 載坤、杉田 智美

〈第一回研究会〉

二〇一九年七月二〇日

牛村 圭「本共同研究の趣旨説明」

二〇一九年七月二一日

牛村 圭「クラウチングスタートという文明を読む」

〈第二回研究会〉

二〇二〇年三月二〇日

藤田 大誠「近代の神社と体育・スポーツ・武道…身体文
化をめぐる日本と西洋の交錯」

古田 島洋介「〈骨（ほね）〉が〈豊（ゆたか）〉なのか？…

解字から説き起こす体育とスポーツ」

二〇二〇年三月二一日

書評会『人種とスポーツ』を読む

評者…吉江 弘和、西山 由理花

東アジア冷戦下の日本における社会運動と文化生産

〔研究代表者〕 宇野田尚哉、坪井秀人

〔共同研究者名〕

キアラ・コマストリ、石川巧、辛島理人、川口隆行、木下千花、小杉亮子、黒川伊織、高榮蘭、佐藤泉、徐潤雅、鳥羽耕史、成田龍一、村上克尚、森岡卓司、ニコラス・ランブレクト

〈第一回研究会〉

二〇一九年五月一八日

研究代表者挨拶、共同研究趣旨説明、共同研究員自己紹介、今後の研究計画の確認

〔所外開催〕 大阪大学豊中キャンパス

二〇一九年五月一九日

大阪大学総合芸術博物館にて企画展「四國五郎展―シベリ

アからヒロシマへ―」を観覧

国際シンポジウム「詩人四國五郎の歩んだ道―シベリア

からヒロシマへ―」に参加

〈第二回研究会〉

二〇一九年七月二七日

石川巧「〈闘争〉と〈運動〉の狭間で…映画「山谷やら

れたらやりかえせ」を読む」

宇野田尚哉「戦後大阪の華僑系新聞と在日朝鮮人…東ア

ジア現代史のなかの『国際新聞』

二〇一九年七月二八日

辛島理人「親米の運動と文化」

木下千花「胎児が密猟するまで…原水爆禁止運動と「胎児」の誕生」

鳥羽耕史「きりえ画家滝平二郎の誕生…連環画から挿絵

へ」

〈第三回研究会〉

二〇一九年一〇月一三日

キアラ・コマストリ「民話と戦後農村女性の語り―山代巴

「路のとう」を中心に」

黒川伊織「サークル誌からミニコミ誌へ―建具職人・和

田喜太郎における文化生産」

小杉亮子「一九六八―一九六九年東大闘争における大学

像の対立―大学の境界を問う営みとしての学生運動」

川口隆行「『原爆に生きて』から考える山代巴の表現と運

動」

〈第四回研究会〉

二〇二〇年二月二二日

黒川伊織「サークル誌からミニコミ誌へ…建具職人・和田喜太郎における文化生産」

田喜太郎における文化生産」

小杉亮子「一九六八～一九六九年東大闘争における大学の対立…大学の境界を問う営みとしての学生運動」

ニコラス・ランブレクト「バリケードの中の五木寛之…放浪、引揚げ、学生運動」

二〇二〇年二月二三日

川口隆行『「原爆に生きて」から考える山代巴の表現と運動」

動」

村上克尚「動物と交わる…津島佑子「伏姫」における人間からの逸脱について」

森岡卓司「基地闘争下の共同制作童話…「ヘイタイのいる村」から「山が泣いてる」へ」

キアラ・コマストリ「山代巴「露のとう」論…朝鮮支配と農村女性」

高榮蘭「HIROSHIMA・光州をめぐる記憶と連帯の表象」

徐潤雅「光州事件と日本に生きる画家たち」

二〇二〇年二月二四日

成田龍一「一九七三年の心性史・戦後日本…高度経済成長のもとでの変化」

佐藤泉「『金石範』か「森崎和江」」

坪井秀人「ストリート・カルチュア再考…寺山修司その他」

近代日本思想を読み直す…次世代への知の継承・刷新のためのツール開発―21世紀の国際的視野に立った学際的・総合的・批判的研究

〔研究代表者 稲賀繁美、中島隆博〕

〔共同研究者名〕

瀧井一博、二村淳子、張競、隠岐さや香、末木文美士、安藤礼二、岡本拓司、中島岳志、荻部直、清水晶子、松浦寿輝、荻谷剛彦、吉見俊哉、西平直、小野塚知二、小島毅、セビリア・アントン、佐藤麻貴、三原芳秋、村中由美子、鶴戸聡、江口久美、戸矢理衣奈、多田伊織

〈第一回研究会〉

二〇一九年七月一日

担当巻の編集方針・文書選択・解説などの提示と討論

末木文美士「第二巻「日本」

中島隆博「第四巻「哲学」

61

岡本 拓司「第五卷「科学・技術」

刈部 直「第八卷「戦争と平和」

二〇一九年七月二〇日

担当巻の編集方針・文書選択・解説などの提示と討論

稲賀 繁美「第六卷「美／藝術」

吉見 俊哉「第十二卷「メディア」

西平 直「第一三卷「心身」

小野塚 知二「第一四卷「経済／経営」

〈第二回研究会〉

（所外開催 東京大学 本郷キャンパス）

二〇一九年一〇月一四日

安藤 礼二「宗教」

吉見 俊哉「メディア」

二〇一九年一〇月一五日

中島 岳志「社会問題」

小島 毅「歴史」

〈第三回研究会〉

二〇二〇年二月二日

担当巻の編集方針・文書選択・解説などの提示と討論

瀧井 一博「第一卷「国家」

水溜 真由美（ゲストスピーカー）「第九卷「ジェンダー」

〈第四回研究会〉

二〇二〇年二月一五日

担当巻の編集方針・文書選択・解説などの提示と討論

松浦 寿輝「第一〇卷「言論／文学」

刈谷 剛彦「第一一巻「教育」

「日本型」教育文化を問い直す―新たな人間形成論をめざして

（研究代表者 瀧井 一博、稲垣 恭子）

〔共同研究者名〕

根川 幸男、西田 彰一、矢野 智司、齊藤 智、竹内 里欧、

ラブリー・ジェルミ、安藤 幸、井上 義和、椎名 健人、

吉江 弘和、高山 敬太

〔海外共同研究員名〕

ジョセフ・トービン、スンイン・ユン、ヨンミ・リ、チン

ジュ・マオ

〈第一回研究会〉

二〇一九年四月一三日

稲垣 恭子「本研究会の趣旨説明」

書評・瀧井 一博『渡邊洪基——衆智を集むるを第一とす』

評者…竹内里欧、井上義和

(所外開催 国際文化会館)

〈第二回研究会〉

二〇一九年一二月七日

チンジュ・プオ「Curriculum reform as constituting and re-

constituting “nation-ness”: a case of Taiwan」

スンイン・ナム「Museum as Method: An Imaginative

Approach to Education」

二〇一九年一二月八日

ヨンミ・リ「Rethinking East Asia: Towards a regional

dialogue in education」

国際文化会館内の図書室における資料調査

(文責…研究協力課)

基礎領域研究

英文日本歴史研究書講読(継続)

代表者 牛村圭

概要 達意の英語で書かれた日本史研究書を素材に、英文

を正しく読み、自然な日本語にする手法の修得を目指す。

中世文学講読(継続)

代表者 荒木浩

概要 日本中世文学の文献を、影印を参照し、英訳などと

も対比しながら精読するとともに、最新の研究動向などについて

の発表や情報交換の場としても活用する。

韓国語の運用(基礎・応用)(継続)

代表者 松田利彦

概要 業務や研究で韓国語を必要とする職員・大学院生等を対象に韓国語の会話・作文・読解の習得を目指した授業

を行う。

古記録学基礎研究(継続)

代表者 倉本一宏

概要 日本前近代の根幹的史料である古記録の解説を、原

本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。

フランス語基礎運用(初級)(継続)

代表者 稲賀繁美

概要 初心者を対象として、初歩の運用能力を実践的に身に

に付ける。教科書としては市販の教材の準備を参加者各自

にお願いする。他の教材は現場で提供する。

フランス語読解補助・論文作成指南（中級）（継続）

代表者 稲賀繁美

概要 中級以上の実務能力開発、論文作成の手ほどきをする。教材については、受講生との相談のうえで決定する。

文学・文化史理論入門（継続）

代表者 坪井秀人

概要 文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテキストの読解・分析の実践的方法を修得する。

近現代史料文献研究（継続）

代表者 瀧井一博

概要 日本近現代史の基礎史料と古典的および先端的な文献を講読し、社会科学的な歴史研究の方法と実践を討究する。

中国古典学の基礎（継続）

代表者 伊東貴之

概要 経書を中心とするオーソドックスな中国古典語の文献を中国音と訓読とを併用して読解する技法を涵養する。併せて中国古典学や儒教入門のための道案内とする。

宗教学基礎論（継続）

代表者 磯前順一

概要 聖俗論、世俗主義論、宗教概念論、禁忌論など、宗教学の基本的な主題を、近代政治史の文脈にのせて議論を行なう。丹念なテキスト講読が中心。

心身技法の実践的・理論的探究（新規）

代表者 稲賀繁美

概要 合気道ほかの心身技法を実際に体験しつつ、心身の鍛錬、呼吸法の体得、精神情緒管理の実践に努める一方、そうした心身技法の理論的考察・記述の可能性を模索する。

彙報

(平成三一年四月一日)

令和二年三月三十一日

人事異動

●平成三一年四月一日 採用

機関研究員 ゴウランガ・チャラン・ブラダン

機関研究員 藤本憲正

技術補佐員 坂知尋

●平成三一年四月一日 任用更新

助教 石川肇

特任助教 前川志織

●平成三一年四月一日 契約

外国人研究員 アンナ・ドゥーリナ(元モスコワ国立大学付属アジア・アフリカ諸国大学講師)

外国人研究員

西野亮太(南太平洋大学准教授)

●平成三一年四月三〇日 契約期間満了

外国人研究員 王海燕(浙江大学教授)

●平成三一年四月一日 委嘱

客員教授 宇野田尚哉(大阪大学教授)

客員教授 中島隆博(東京大学東洋文化研究所教授)

客員教授

稲垣恭子(京都大学教授)

客員教授 蘭信三(上智大学教授)

客員准教授 松井茂(情報科学芸術大学院大学准教授)

客員准教授 二村淳子(鹿児島大学共通教育センター講師)

●平成三一年五月一日 契約

外国人研究員

ケリー・フォアマン(ウェイ

ン州立大学副講師)

●令和元年六月三〇日 契約期間満了

外国人研究員 マウリシオ・マルティネス・ロドリゲス(元コロンビア工科大学講師)

●令和元年七月一日 契約

外国人研究員 アリステア・スウェール(ワ

イカト大学上級講師)

●令和元年七月三十一日 契約期間満了

外国人研究員 光平有希

外国人研究員 ケラー・キンブロー(コロラド大学教授)

外国人研究員 リーダー・津野田典子(マ

イアミ大学教授)

●令和元年八月一日 契約

外国人研究員 李市竣(崇実大学校教授)

外国人研究員 サイモン・パートナー

(デューク大学教授)

外国人研究員 アストギク・ホワニシャン

(ロシア・アルメニア大学上級講師)

外国人研究員 廖欽彬(中山大学准教授)

●令和元年八月三十一日 契約期間満了

外国人研究員 孫衛國(南開大学教授)

●令和元年九月一日 契約

外国人研究員 李杰玲(広東第二師範学院准教授)

外国人研究員 ジェームス・ケテラー(シカ

ゴ大学教授)

外国人研究員 鄭毅(北華大学教授)

●令和元年九月三〇日 辞職

機関研究員 光平有希

- ◎令和元年一〇月一日 採用
 助教 松木裕美
 技術補佐員 井岡詩子
 ◎令和元年一〇月一日 任用更新
 助教 呉座勇一
 ◎令和元年一〇月一日 併任
 総合情報発信室特任助教 光平有希
 ◎令和元年一〇月一日 契約
 外国人研究員 王中忱（清華大学人文学院教授）
 ◎令和元年一〇月三十一日 契約期間満了
 外国人研究員 ケリー・フォアマン（ウェイ
 ン州立大学副講師）
 ◎令和元年一二月三〇日 契約期間満了
 外国人研究員 鄭毅（北華大学教授）
 ◎令和元年一二月三十一日 契約期間満了
 外国人研究員 孫江（南京大学政府管理学
 院教授）
 ◎令和二年二月一日 契約
 外国人研究員 マッシミリアーノ・トマシ
 （西ワシントン大学教授）
 ◎令和二年三月一日 契約
 外国人研究員 阮南（ベトナムフルブラ
 イト大学教授）
 ◎令和二年三月三〇日 契約解除
 外国人研究員 アリステア・スウェール（カ
 ンタベリー大学准教授）
 ◎令和二年三月三十一日 任期満了退職
 所長 小松和彦
 ◎令和二年三月三十一日 定年退職
 教授 細川周平
 ◎令和二年三月三十一日 契約期間満了
 外国人研究員 アンナ・ドゥーリナ（元モス
 クワ国立大学付属アジア・アフリカ諸国大
 学講師）
 外国人研究員 西野亮太（南太平洋大学准
 教授）
 外国人研究員 王中忱（清華大学人文学院
 教授）
 ◎令和二年三月三十一日 任期満了退職
 機関研究員 根川幸男
 機関研究員 稲垣智恵
 機関研究員 小田龍哉
 技術補佐員 西田彰一
 技術補佐員 堀井佳代子
 ◎令和二年三月三十一日 委嘱期間満了
 客員教授 鈴木岩弓（東北大学総長特命教授）
 客員教授 中原ゆかり（愛媛大学教授）
 客員教授 宇野田尚哉（大阪大学教授）
 客員教授 中島隆博（東京大学東洋文化研
 究所教授）
 客員教授 稲垣恭子（京都大学教授）
 客員教授 蘭信三（上智大学教授）
 客員准教授 山本忠宏（神戸芸術工科大学
 助教）
 客員准教授 吉村智博（大阪人権博物館
 非常勤嘱託学芸員）
 客員准教授 伊藤慎吾（学習院女子大学
 非常勤講師）
 客員准教授 永崎研宣（人文情報学研究所
 主席研究員）
 客員准教授 松井茂（情報科学芸術大学院
 大学准教授）

日文研フォーラム

第三二八回「平成三十一年四月九日（火）」

発表者 グエン・ヴー・クイン・ニュー（ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学

大学講師／日文研外来研究員（日本学術振興会外国人特別研究員）

テーマ ペトナムにおける日本学研究的の現在

コメンテーター 荒木浩副所長

第三二九回「令和元年六月一日（金）」

発表者 リーダー・津野田典子（マイアミ大学教授／日文研外国人研究員）

テーマ 鬼と鬼女と山姥と——山姥と鬼の關係

コメンテーター 山田埜治教授

第三三〇回「令和元年七月五日（金）」

発表者 孫江（南京大学教授／日文研外国人研究員）

テーマ 越境する民衆宗教——大正・昭和前期における大本教と道院・紅卍字会の關係を中心

コメンテーター 劉建輝副所長

第三三一回「令和元年九月一日（金）」

発表者 アンナ・ドゥーリナ（日文研外国人研究員）

テーマ 八幡神、変貌するその姿

コメンテーター 磯前順一教授

第三三二回「令和元年十一月二〇日（水）」

発表者 西野亮太（南太平洋大学上級講師／日文研外国人研究員）

テーマ「旅する記憶」太平洋戦争の記憶と追体験——バプアニューギニア戦線を中心に

コメンテーター 楠綾子准教授

第三三三回「令和二年一月一日（火）」

発表者 李市竣（崇実大学校教授／日文研外国人研究員）

テーマ 天人女房譚の地域性と国際性——韓国との比較を通じて

コメンテーター 荒木浩副所長

第三三四回「令和二年二月一日（金）」

発表者 王中忱（清華大学人文学院教授／

日文研外国人研究員）

テーマ 思想の越境と連鎖——尾崎秀実の中国論と「中国農村派」

コメンテーター 劉建輝副所長

木曜セミナー

第二五五回「平成三十一年四月一日（木）」

発表者 光平有希機関研究員

テーマ「宗田文庫」にみる東西医療文化史

研究の諸相

第二五六回「令和元年五月二三日（木）」

発表者 井上章一教授、磯前順一教授

テーマ『希望の歴史学』（藤間生大著、磯前

順一・山本昭宏編）をめぐる

第二五七回「令和元年六月二〇日（木）」

発表者 江上敏哲資料課資料利用係長

テーマ 図書館が日文研と世界をつなぐ——

OLC他による海外連携と図書館サービス

第二五八回「令和元年七月一日（木）」

発表者 小田龍哉機関研究員

テーマ 南方熊楠と土宜法龍——近代日本の

宗教と思想再考

第二五九回「令和元年九月一九日（木）」

発表者 根川 幸男機関研究員、稲賀 繁美教授

テーマ 日本関連在外資料調査研究・活用事業「プロジェクト間連携による研究成果活用」班からの提案

第二六〇回「令和元年十一月二八日（木）」

発表者 フレデリック・クレインス准教授、光平 有希特任助教、ゴウランガ・チャラ

ン・プラダン機関研究員、小川 仁関西大学東西学術研究所PD／日文研技術補佐員

テーマ 日本関係欧文史料の世界——外書プロジェクトの研究活動と成果発信

第二六一回「令和二年一月二三日（木）」

発表者 稲垣 智恵機関研究員
テーマ 対外接触による近現代中国語の変遷

第二六二回「令和二年二月二〇日（木）」

発表者 牛村 圭教授
テーマ 「文明」としる Athletics: 『文明と身体』の一事例

Nichibunken Evening Seminar

第二三三回「平成三一年四月四日（木）」

発表者 ケラー・キンブロー（コロラド大学教授／日文研外国人研究員）

テーマ Combat Curses and Samurai Spells in the “Kōwakamar” Warrior Fiction of Late Medieval Japan

第二三六回「令和元年五月九日（木）」

発表者 リーダー・津野田典子（マイアミ大学教授／日文研外国人研究員）

テーマ Otherworldly Women “Yamauba”, Mountain Witches: On Duality of “Yamauba”

第二三七回「令和元年七月一日（木）」

発表者 ダニエル・ミルン（京都大学国際高等教育院講師）、アンドリュュー・エリオット（同志社女子大学准教授）

テーマ War, Tourism, and Modern Japan

第二三八回「令和元年九月五日（木）」

発表者 ケリー・フォアマン（ウェーン州立大学講師／パレエデトロイトダンス歴史

家／日文研外国人研究員）

テーマ Hearing Butch: Sonic Analyses of a Growing Japanese Performance Art

第二三九回「令和元年十一月七日（木）」

発表者 アーウィン・デジャス（ブリュッセル自由大学（ULB）FNRS研究員／日文研外来研究員）

テーマ Art Brut at the Fringe of Comics

第二四〇回「令和元年十二月五日（木）」

発表者 アリステア・スウェール（カンタベリー大学准教授／日文研外国人研究員）

テーマ Expanding the Notion of “Civilization and Enlightenment”: the Role of Popular Literature and Art in the Early Meiji Period

第二四一回「令和二年二月六日（木）」

発表者 全 鎮晟（国立釜山教育大学校教授）

テーマ Imaginary Athens in Berlin, Tokyo and Seoul: Memory and Architecture from a Transmodern Viewpoint

日文研・アイハウス連携フォーラム

第一七回「令和元年六月五日（水）」

講演者 マウリシオ・マルティネス・ロドリ

ゲス外国人研究員

テーマ スペイン語圏における日本芸能…その

の受容とオンライン百科事典の役割

第一八回「令和元年十一月二二日（金）」

講演者 磯前順一教授

テーマ 日文研の三十年——その批判的・分

析的な回顧および展望

日文研特別公開シンポジウム

「令和元年十一月九日（土）」

テーマ 天皇と皇位継承——過去と現在の視座

【第一部 古代の王権】

講演…『万葉集』と王権

講演者 中西進名誉教授

司会 磯田道史准教授

対談

登壇者 中西進名誉教授、磯田道史准教授

【第二部 過去と現在の皇位継承】

講演…皇位継承の諸問題——内と外の観点

講演者 倉本一宏教授、ジョン・ブリー

教授、君塚直隆（関東学院大学教授）

司会 楠綾子准教授

座談会…過去と現在の皇位継承

登壇者 中西進名誉教授、磯田道史准教授、

倉本一宏教授、ジョン・ブリー

教授、君塚直隆（関東学院大学教授）

司会 楠綾子准教授

海外シンポジウム

「令和二年二月一三～一五日（木～土）」

テーマ On the Heritage of Postcolonial

Studies: Translation of the Untranslatable

場所 コーネルクラブ（ニューヨーク…ア

メリカ）

レクチャー

第一五八回「令和元年六月二七日（木）」

発表者 プラセンシット・ドゥアラ（デュー

ク大学教授）

テーマ Revisiting the Chinese World Order:

Soft Power or the Imperialism of Nation-states

コメンテーター 鍾以江（東京大学東洋文

化研究所准教授／日文研客員准教授）、稲

賀繁美教授

司会 楠綾子准教授

第一五九回「令和元年九月二五日（水）」

発表者 ダニ・オルバフ（ヘブライ大学上級

講師）、森靖夫（同志社大学准教授）

テーマ 「暴走する日本軍兵士 帝国を崩壊さ

せた明治維新の「バグ」

司会 瀧井一博教授

第一六〇回「令和元年九月二六日（木）」

発表者 小林敏明（ライプツィヒ大学東ア

ジア研究所日本学科名誉教授）

テーマ 〈近代の超克〉新論

コメンテーター 廖欽彬（外国人研究員

司会 伊東貴之教授

会議

運営会議

第五二回	令和元年	六月二十八日(金)	第三二九回	令和元年	一〇月二日(水)	第三二六回	令和元年	七月一八日(木)
第五三回	令和元年	九月二〇日(金)	第三三〇回	令和元年	一〇月一六日(水)	第三二七回	令和元年	九月五日(木)
第五四回	令和元年	十二月一日(金)	第三三一回	令和元年	十一月六日(水)	第三二八回	令和元年	九月一九日(木)
第五五回	令和二年	三月六日(金)	第三三二回	令和元年	十一月二七日(水)	第三二九回	令和元年	一〇月三日(木)
		(書面審議)	第三三三回	令和元年	十二月四日(水)	第三三〇回	令和元年	一〇月一七日(木)
		三月二三日(月)	第三三四回	令和元年	(開催中止)	第三三一回	令和元年	十一月七日(木)
		(書面審議)	第三三五回	令和二年	一月二八日(水)	第三三二回	令和元年	十一月二八日(木)
		三月二三日(月)	第三三六回	令和二年	一月八日(水)	第三三三回	令和元年	十二月五日(木)
		(書面審議)	第三三七回	令和二年	二月二日(水)	第三三四回	令和元年	(開催中止)
		四月一七日(水)	第三三八回	令和二年	二月五日(水)	第三三五回	令和元年	十二月一九日(木)
		五月八日(水)	第三三九回	令和二年	二月一九日(水)	第三三六回	令和二年	一月九日(木)
		五月二二日(水)	第三四〇回	令和二年	三月四日(水)	第三三七回	令和二年	二月六日(木)
		六月五日(水)	センター会議		三月一八日(水)	第三三八回	令和二年	二月二〇日(木)
		六月一八日(火)			四月四日(木)	第三三九回	令和二年	三月五日(木)
		七月三日(水)	第三二〇回	平成三一年	四月一八日(木)	第三四〇回	令和二年	三月一九日(木)
		七月一七日(水)	第三二一回	令和元年	五月九日(木)			
		九月四日(水)	第三二二回	令和元年	五月二三日(木)			
		九月一八日(水)	第三二三回	令和元年	六月六日(木)			
			第三二四回	令和元年	六月二〇日(木)			
			第三二五回	令和元年	七月四日(木)			

調整会議

第三一九回	平成三一年	四月三日(水)	第三二九回	令和元年	一〇月二日(水)	第三二六回	令和元年	七月一八日(木)
第三二〇回	平成三一年	四月一七日(水)	第三三〇回	令和元年	一〇月一六日(水)	第三二七回	令和元年	九月五日(木)
第三二一回	令和元年	五月八日(水)	第三三一回	令和元年	十一月六日(水)	第三二八回	令和元年	九月一九日(木)
第三二二回	令和元年	五月二二日(水)	第三三二回	令和元年	十一月二七日(水)	第三二九回	令和元年	一〇月三日(木)
第三二三回	令和元年	六月五日(水)	第三三三回	令和元年	十二月四日(水)	第三三〇回	令和元年	一〇月一七日(木)
第三二四回	令和元年	六月一八日(火)	第三三四回	令和元年	(開催中止)	第三三一回	令和元年	十一月七日(木)
第三二五回	令和元年	七月三日(水)	第三三五回	令和元年	一月二八日(水)	第三三二回	令和元年	十一月二八日(木)
第三二六回	令和元年	七月一七日(水)	第三三六回	令和元年	一月八日(水)	第三三三回	令和元年	十二月五日(木)
第三二七回	令和元年	九月四日(水)	第三三七回	令和元年	二月二日(水)	第三三四回	令和元年	(開催中止)
第三二八回	令和元年	九月一八日(水)	第三三八回	令和元年	二月五日(水)	第三三五回	令和元年	十二月一九日(木)
			第三三九回	令和元年	二月一九日(水)	第三三六回	令和元年	一月九日(木)
			第三四〇回	令和元年	三月四日(水)	第三三七回	令和元年	二月六日(木)
			センター会議		三月一八日(水)	第三三八回	令和元年	二月二〇日(木)
					四月四日(木)	第三三九回	令和元年	三月五日(木)
			第三二〇回	平成三一年	四月一八日(木)	第三四〇回	令和元年	三月一九日(木)
			第三二一回	令和元年	五月九日(木)			
			第三二二回	令和元年	五月二三日(木)			
			第三二三回	令和元年	六月六日(木)			
			第三二四回	令和元年	六月二〇日(木)			
			第三二五回	令和元年	七月四日(木)			

外国人来訪者

令和元年一〇月二四日	Onufy Berdnak (チハ コ科学アカデミー東洋研究所所長)、他三 名
------------	---

令和元年一月二五日 国際交流基金関西西国

令和元年 二月三日 国際交流基金・二〇一九
年度ロシア若手研究者育成プログラム参加
者ご一行、計一二名

海外渡航

目的 オーフス大学にてワークショップに参加し発表及び交流、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院にて交流及びネットワーク構築、セインズベリー日本芸術研究所にて面談

目的国 デンマーク、イギリス
 期間 平成三年四月一四日～二六日
 関野樹 教授
 目的 中央研究院にてワークショップ

目的国 台湾

目的 釜慶大学にて国際学術大会に出席し研究発表

目的国 韓国

目的 翰林大学日本学研究所にて国際シンポジウムに参加し発表及び討論

目的国 韓国

期 間 平成三一年四月二五日～二九日
坪井秀人 教授

目的 イェール大学にて招聘講演及びシンポジウムに参加し報告、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院にて講演、ダラム大学にて国際会議に参加し基調講演

て国際会議に参加し基調講演
 目的国 アメリカ、イギリス
 期間 令和元年五月一日～五月二日
 稲賀繁美 教授

目的　ドラム大学にて学会に参加し登壇、

ウィットビー、ヨーク、ニューカッスルにて資料調査

期間 令和元年五月七日～一五日
松田利彦 教授

目的 韓國國會圖書館、延世大學校中央圖

書館 韓國研究院、韓國国立中央図書館
ソウル大学校中央図書館、エビソン記念
館、オーウェン記念閣、ウィルソン宣教師
邸、旧スピア女学校スピアホールにて論文

目的国 韓国
期間 令和元年五月一六日～二一日

関野樹 教授
目的 中央研究院、国立台湾歴史博物館にてワークショップの打合せ及び参加し発表
目的国 台湾

目的	劉建輝	期間	令和元年五月二七日～六月一日
目的	南京大學にて講義	教授	

目的国 中国

- 期 間 令和元年五月二七日～六月一日
 関野樹 教授
 目 的 ビクトリア大学にて打合せ、講義及び意見交換
 目的国 カナダ
 期 間 令和元年六月二日～九日
 小松和彦 所長
 目 的 パリ第七・デイドロ大学、INALCO（フランス国立東洋言語文化学院）にて会場視察し打合せ、パリ日本文化会館にて展覧会参観
 目的国 フランス
 期 間 令和元年六月五日～一〇日
 石川肇 助教
 目 的 パリ第七・デイドロ大学、INALCO（フランス国立東洋言語文化学院）にて会場視察し打合せ、パリ日本文化会館にて展覧会参観
 目的国 フランス
 期 間 令和元年六月五日～一〇日
- 安井眞奈美 教授
 目 的 喜興市内にてフィールドワーク、上海大学にて講演
 目的国 中国
 期 間 令和元年六月六日～一〇日
 稲賀繁美 教授
 目 的 Association of Polish Architects (SARP) にて発表及びワークショップ等に参加、パリ第七・デイドロ大学にて打合せ、パリ日本文化会館にて館長と面談、展覧会を見学し調査
 目的国 ポーランド、フランス
 期 間 令和元年六月六日～一四日
 坪井秀人 教授
 目 的 クイーンズランド大学にて客員研究員として一般公演、大学院ワークショップ等にて講演及び教授し報告
 目的国 オーストラリア
 期 間 令和元年六月二二日～三〇日
 呉座勇一 助教
 目 的 Kazakh University of International Relations and World Languages につ国際学術大会に参加
 目的国 カザフスタン
 期 間 令和元年七月五日～一〇日
 関野樹 教授
 目 的 TivoliVredenburg にてワークショップの報告準備、会場視察、参加及び情報収集
 目的国 オランダ
 期 間 令和元年七月五日～一三日
 瀧井一博 教授
 目 的 バルセロナ市庁舎にて視察し資料収集 Congress Centre of Andorra la Vella にて学会に参加し情報収集及び研究発表、バルセロナ自治大学にて日本研究プログラム長と面談し意見交換
 目的国 スペイン、アンドラ公国
 期 間 令和元年七月一日～二二日
 坪井秀人 教授
 目 的 木浦市にて見学及び学術フォーラムに参加し発表、珍島・倭徳山にて調査

目的国 韓国

期間 令和元年七月二日～二四日

関野樹 教授

目的 タイにてワークショップに出席し発表及び意見交換

目的国 タイ

期間 令和元年七月二日～二五日

稲賀繁美 教授

目的 マカオ大学にて国際比較学会大会のパネルディスカッションに参加、香港海事博物館等にて調査

目的国 中国

期間 令和元年七月二八日～八月五日

楠綾子 准教授

目的 中央研究院近代史研究所にて講演、史料収集及び研究者との懇談等

目的国 台湾

期間 令和元年八月二日～二六日

石上阿希 特任助教

目的 大英図書館にて調査及びシンポジウムに参加し情報収集、大英博物館にて打合せ

目的国 イギリス

期間 令和元年八月二〇日～二六日

磯前順一 教授

目的 淑明女子大学、崇義女子大学校にてシンポジウムに参加し発表、安重根義士記念館、韓国銀行貨幣金融博物館、新世界百貨店、西大門刑務所、南山園にて調査

目的国 韓国

期間 令和元年八月二二日～二五日

伊東貴之 教授

目的 中央研究院中国文哲研究所にて研究報告、資料調査及び研究打合せ

目的国 台湾

期間 令和元年九月三日～七日

坪井秀人 教授

目的 チュラーロンコーン大学にてセミナーを主催し総括

目的国 タイ

期間 令和元年九月五日～一〇日

劉建輝 教授

目的 南開大学歴史学院にて国際学術討論

会に出席し研究発表

目的国 中国

期間 令和元年九月八日～一一日

坪井秀人 教授

目的 サハリン州郷土博物館、樺太神社跡地、王子製紙大泊工場跡、朝鮮人慰霊碑、サハリン国立総合大学、国立サハリン州歴史文書館等にてシンポジウムに参加し報告及び情報収集

目的国 ロシア

期間 令和元年九月一四日～一九日

関野樹 教授

目的 ソフィア大学にてEAJRS (European Association of Japanese Resource Specialists) 年次大会の報告準備、会場視察し研究報告及び情報収集、National Archaeological Institute with Museum にて情報収集

目的国 ブルガリア

期間 令和元年九月一六日～二四日

倉本一宏 教授

目的 鄭州大学 外国語・国際関係学院にて

て集中講義

目的国 中国

期間 令和元年九月二三日～二六日

松田利彦 教授

目的 翰林大学校にて懇談会に参席し発表、韓国国会図書館にて資料調査

目的国 韓国

期間 令和元年九月二四日～二六日

小松和彦 所長

目的 北京外国語大学北京日本学研究センターにて国際シンポジウムに討論者として

出席

目的国 中国

期間 令和元年九月二六日～三〇日

楠綾子 准教授

目的 北京外国語大学北京日本学研究センターにて国際シンポジウムに討論者として

出席

目的国 中国

期間 令和元年九月二七日～三〇日

目的国 中国

期間 令和元年九月二七日～三〇日

磯前順一 教授

目的 北京外国語大学北京日本学研究センターにて国際シンポジウムに討論者として

出席、清華大学人文社会高等研究所にて共同報告

同報告

目的国 中国

期間 令和元年九月二七日～一〇月一日

劉建輝 教授

目的 中国文化大学にて国際学術論壇に出席し研究発表

席し研究発表

目的国 台湾

期間 令和元年一〇月三日～六日

磯前順一 教授

目的 高麗大学校にて国際会議で発表、翰林大学校にて国際会議で発表、翰林大学日本学研究所にて聞き取り調査、チェコ共和国科学アカデミー東洋学研究所にてシンポジウムに参加し発表及び調査等、ポツダム大学にて教授と打合せ

目的国 韓国、チェコ共和国、ドイツ

期間 令和元年一〇月五日～一七日

荒木浩 教授

目的 翰林大学校にてワークショップに出席し発表

目的国 韓国

期間 令和元年一〇月七日～一〇日

安井眞奈美 教授

目的 エトヴィシュ・ローランド大学にて講演、チェコ共和国科学アカデミー東洋学研究所にてシンポジウムで発表し意見交換及び研究交流、カレル大学にて教授と面談し講義

目的国 ハンガリー、チェコ共和国

期間 令和元年一〇月七日～一五日

山田奨治 教授

目的 アメリカ議会図書館にて理事会出席及び調査

目的国 アメリカ

期間 令和元年一〇月九日～一五日

大塚英志 教授

目的 鄭州大学外国語・国際関係学院にてワークショップを開催

目的国 中国

目的国 中国

期間 令和元年一〇月一〇日～一二日

松田利彦 教授

目的 韓国警察庁にて学術セミナーに参加し発表、長老会神学大学校図書館にて資料収集

目的国 韓国

期間 令和元年一〇月一四日～一六日

関野樹 教授

目的 南洋理工大學エグゼクティブセクターにて国際会議に出席しセッションを主催及び発表

目的国 シンガポール

期間 令和元年一〇月一四日～二〇日

坪井秀人 教授

目的 山東師範大学にて国際シンポジウムに出席し基調講演、山東女子学院にて講演会に出席し講演

目的国 中国

期間 令和元年一〇月一七日～二二日

大塚英志 教授

目的 北京外国語大学北京日本学研究センターにてフォーラムで報告、北京外国語大学にてフォーラムで報告、中国国家図書館、上海図書館にて資料調査

目的国 中国

期間 令和元年一〇月一八日～二六日

小松和彦 所長

目的 パリ第七・デイドロ大学、INALCO（フランス国立東洋言語文化学院）にてアカデミックプログラムに参加し運営、パリ第七大学にてシンポジウムに参加し講演、及びパリ日本文化会館にて展示及び映画上映の運営

目的国 フランス

期間 令和元年一〇月二〇日～二六日

細川周平 教授

目的 パリ第七・デイドロ大学、INALCO（フランス国立東洋言語文化学院）にてアカデミックプログラムに参加し発表、パリ第七大学にてシンポジウムに参加し運営

及びパリ日本文化会館にて展示、映画上映の運営及び講演

目的国 フランス

期間 令和元年一〇月二〇日～二六日

荒木浩 教授

目的 パリ第七・デイドロ大学、INALCO（フランス国立東洋言語文化学院）にてアカデミックプログラムに参加し運営、パリ第七大学にてシンポジウムに参加し運営、及びパリ日本文化会館にて展示及び映画上映の運営

目的国 フランス

期間 令和元年一〇月二〇日～二六日

石川肇 助教

目的 パリ日本文化会館にて展示設置及び運営

目的国 フランス

期間 令和元年一〇月二〇日～二八日

稲賀繁美 教授

目的 ワルシャワ大学東洋学部日本学科にて国際学会に参加

- 目的国 ポーランド
 期間 令和元年一〇月二一日～二八日
 瀧井一博 教授
 目的 カイロ大学にて招待講演、同大学及び周辺の研究協力機関にて調査
 目的国 エジプト
 期間 令和元年一〇月二二日～三〇日
 大塚英志 教授
 目的 Chungkang College of Cultural and Industries にて講演
 目的国 韓国
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月一日
 倉本一宏 教授
 目的 台湾大学にて国際学術大会に参加し発表
 目的国 台湾
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月三日
 榎本渉 准教授
 目的 台湾大学にて国際学術大会に参加し発表
 目的国 台湾
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月四日
 白石惠理 助教
 目的 台湾大学にて国際学術大会に参加し発表、国立故宫博物院にて鑑賞、調査及び情報収集
 目的国 台湾
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月五日
 松田利彦 教授
 目的 台湾大学にて国際学術大会に参加し発表、国家図書館にて資料調査、新北市淡水にて史跡踏査
 目的国 台湾
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月六日
 吳座勇一 助教
 目的 福華国際文教会館、台湾大学にて国際学術大会に参加
 目的国 台湾
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月四日
 小松和彦 所長
 目的 台湾大学にて国際学術大会に発起人として出席
 目的国 台湾
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月四日
 ジョン・ブリーン 教授
 目的 モナシユ大学にて国際シンポジウムの事前打合せ及び研究発表
 目的国 オーストラリア
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月五日
 坪井秀人 教授
 目的 コロンビア大学にて国際ワークシヨップで研究報告、情報収集及び打合せ
 目的国 アメリカ
 期間 令和元年一〇月三一日～十一月六日
 楠綾子 准教授
 目的 アルザス欧州日本学研究所にてワークシヨップを主催、調査及びネットワーク形成
 目的国 フランス
 期間 令和元年一〇月三〇日～十一月四日
 松本裕美 助教
 目的 福華国際文教会館、台湾大学にて国際学術大会に参加しネットワーク構築、情

報収集及び意見交換、中治環境造形顧問有限公司にて聞き取り調査及び資料収集、台北植物園、台北故宫博物院にて施設見学

目的国 台湾

期間 令和元年一〇月三十一日～一月六日

安井眞奈美 教授

目的 北京大学にてコロキウムに出席

目的国 中国

期間 令和元年一月三日～六日

荒木浩 教授

目的 ベトナム国家大学ハノイ校人文社会科学大学にて学術交流協定締結及びシンポジウム等に出席

目的国 ベトナム

期間 令和元年一月一日～一四日

劉建輝 教授

目的 中央研究院にて国際シンポジウムに出席し研究発表

目的国 台湾

期間 令和元年一月二七日～二九日

磯前順一 教授

目的 デューク大学にて発表し見学、コロンビア大学にて発表、国際交流基金ニューヨーク事務所にて教授と面談及び海外シンポジウムの打合せ

目的国 アメリカ

期間 令和元年一月二日～八日

安井眞奈美 教授

目的 プリンストン高等研究所、プリンストン大学にて施設等見学、コロンビア大学にて発表、国際交流基金ニューヨーク事務所にて教授との面談及び海外シンポジウムの打合せ

目的国 アメリカ

期間 令和元年一月二日～九日

楠綾子 准教授

目的 東北師範大学にて講演、旧新京神社、旧建国廟にて調査及び見学

目的国 中国

期間 令和元年一月二七日～三一日

榎本渉 准教授

目的 福州市博物館、福州琉球墓園にて資料の打合せ

目的国 アメリカ

期間 令和元年一月二日～九日

楠綾子 准教授

目的 プリンストン高等研究所、プリンストン大学にて施設等見学、コロンビア大学にて発表、国際交流基金ニューヨーク事務所にて教授との面談及び海外シンポジウムの打合せ

目的国 アメリカ

期間 令和元年一月二日～九日

小松和彦 所長

目的 ジャワハルラル・ネルー大学にて講義及び付随業務

目的国 インド

期間 令和元年一月七日～一二日

楠綾子 准教授

目的 ベトナム社会科学学院、Hotel Union Phnom Penh、フノンペン経済特区、Gomi Recycle 110 Co., Ltd.にて意見交換、聞き取り調査及び資料調査

目的国 ベトナム、カンボジア

期間 令和元年一月二五日～二八日

磯前順一 教授

目的 東北師範大学にて講演、旧新京神社、旧建国廟にて調査及び見学

目的国 中国

期間 令和元年一月二七日～三一日

榎本渉 准教授

目的 福州市博物館、福州琉球墓園にて資料の打合せ

料調査

目的国 中国

期間 令和二年一月三日～一六日

関野樹 教授

目的 中央研究院人文社会科学研究所セン

ターにて研究打合せ

目的国 台湾

期間 令和二年一月一九日～二二日

大塚英志 教授

目的 韓国国立中央図書館にて資料調査

目的国 韓国

期間 令和二年一月二〇日～二三日

ジョン・ブリーン 教授

目的 ロンドン大学東洋アフリカ研究学院

(SOAS) にて情報交換、ネットワーク構築

及び調査、ゲント大学にて国際シンポジウ

ムの下見

目的国 イギリス、ベルギー

期間 令和二年二月一〇日～一三日

安井眞奈美 教授

目的 シカゴ大学図書館にて文献調査、

The Cornell Club にて日文研海外シンポジ

ウムに出席、ラファエット大学にて発表

目的国 アメリカ

期間 令和二年二月一〇日～一九日

松本裕美 助教

目的 The Cornell Club にて日文研海外シ

ンポジウムの準備及び運営、ブルックリン

植物園、ニューヨーク市立図書館にて研究

調査及び文献調査

目的国 アメリカ

期間 令和二年二月一〇日～一九日

磯前順一 教授

目的 The Cornell Club にて日文研海外シ

ンポジウムの運営及び発表、アマースト大

学にて発表

目的国 アメリカ

期間 令和二年二月一日～一九日

荒木浩 教授

目的 The Cornell Club にて日文研海外シ

ンポジウムの運営及びコメント

目的国 アメリカ

期間 令和二年二月一二日～一七日

松田利彦 教授

目的 The Cornell Club にて日文研海外シ

ンポジウムの運営及び発表、ニューヨーク

市内にて史跡調査、徐載弼記念館にて資料

調査、コロンビア大学にて資料調査

目的国 アメリカ

期間 令和二年二月一二日～二〇日

楠綾子 准教授

目的 The Cornell Club にて日文研海外シ

ンポジウムの運営及びコメント、コロンビ

ア大学東アジア図書館にて資料調査

目的国 アメリカ

期間 令和二年二月一二日～二一日

安井眞奈美 教授

目的 The Art Gallery of New South Wales

にてプログラムに招聘参加し講演

目的国 オーストラリア

期間 令和二年二月二五日～三月二二日

所員活動一覧（二〇一九年四月一日～二〇二〇年三月三一日）

荒木 浩

● 著書

『日本文学研究ジャーナル 第10号』（小林直樹と共編）古典ライブラリー 二〇一九年六月 一五八頁

● 論文

「私」の物語と同時代性——書くこと、読むこと、訳すこと」公益財団法人サントリー文化財団・アステイオン編集委員会編『アステイオン 90』CCCメディアハウス 二〇一九年五月 六八頁～一七四頁（依頼論文）

「源隆国晩年の対外観と仏教—宇治一切経藏というトポスをめぐって—」『日本文学研究ジャーナル 第10号』古典ライブラリー 二〇一九年六月 一七頁～三〇頁（依頼論文）

「11世紀日本対謝霊運の認識及評価差異」（中国語）『日語学習と研究』北京報刊発行局 2019年第5期 二〇一九年一〇月 一〇九頁～一二七頁（依頼論文・査読付き）

「慧遠・謝霊運の位置付け—源隆国『安養集』の戦略をめぐって」蔣義喬編著『六朝文化と日本 謝霊運という視座から』アジア遊学 勉誠出版 二〇一九年十一月 一二九頁～一三九頁（査読付き）

● その他の執筆活動

「文遊回廊」（連載一〇回）『京都新聞』二〇一九年四月二八日～二〇二〇年三月二六日

「方丈記」「徒然草」は禅宗とどうかかわるのか」松田浩、上原作和、佐谷眞木人、佐伯孝弘著『古典文学の常識を疑うII 縦・横・斜めから書きかえる文学史』勉誠出版 二〇一九年九月

「エッセイ」基礎領域研究「中世文学購読」由来—私的回想を兼ねて—『日文研』六三三号 二〇一九年九月
対談「広島・京都文化フォーラム「雅と創造 古典でひもとく」」『中国新聞』他一紙掲載 二〇一九年十一月二九日他

「一九七五年の益田勝実と梅原猛——私的回想の断章として」石川肇、井上章一、岩水久美、榎本涉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井眞奈

美編『梅原猛先生追悼集―天翔ける心』 国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

石上 阿希

●論文

『錦絵は何をうつしたか』『女・おんな・オンナ―浮世絵にみる女のくらし展図録』渋谷区立松濤美術館 二〇一九年四月 六頁～一〇頁

●その他の執筆活動

〔分担執筆〕What Do Ukiyo-e Reproduce? (英語)『女・おんな・オンナ―浮世絵にみる女のくらし展図録』渋谷区立松濤美術館 二〇一九年四月

『巻頭言』絵と言葉で文化に接続する―「近世期絵入百科事典データベース」の構築と運用』『人文情報学月報 93号前編』人文情報学月報編集室 二〇一九年四月

インタビュ―「ときを結ぶ23春画」『共同通信社』二〇一九年六月

「デザインを階層で分類する―西川祐信画『正徳雛形』『ふみ』第12号 国文学研究資料館 二〇一九年六月

インタビュ―「この人 春画の正当な評価を訴える研究者 石上阿希さん」『中日新聞』二〇一九年六月三〇日

「日文研コレクションが語る女性と春画」『文化記録映画「春画と日本人」パンフレット』ヴィジュアルフォークロア 二〇一九年九月

インタビュ―「春画 展示の自由へ開く」『朝日新聞』二〇一九年一〇月二五日

「なぜ春画の魅力は、これほどまでにわれわれを惹きつけるのか?」『講談社現代新書ウェブサイト』二〇一九年一〇月

「江戸時代の絵入百科事典を現代につなげる―地域におけるアウトリーチと情報発信」『ぎざし』Vol.4 人間文化研究機構 二〇二〇年三月

書評「ジュリー・ネルソン・デビス著『版画におけるパートナーズ―芸術世界の共同制作と浮世絵マーケット』」『日本研究』第六〇集

国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

石川 肇

● 著書

- 『想像×創造する帝国 吉田初三郎 鳥瞰図への誘い』（劉建輝、古川綾子と共編）国際日本文化研究センター 二〇一九年八月 一三四頁
『梅原猛先生追悼集―天翔ける心』（井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井眞奈美と共編）国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月 二九一頁

● 論文

- 『翻訳教材による「緩やかな平和教育」』『阿部知二研究・城からの手紙』第26号 阿部知二研究会 二〇一九年四月 二七頁～五三頁
『反転する井伊直弼 「花の生涯」執筆理由と戦争体験』坪井秀人編『戦後日本文化再考』三人社 二〇一九年一〇月 一六九頁～一八六頁
●その他の執筆活動

インタビュ―「旗本退屈男」豪華着物を発見 映画黄金期の114点』『KYODO（共同通信ネット）』他 一八新聞掲載 二〇一九年七月三〇日
他

インタビュ―「天下御免の豪華衣裳」『朝日新聞』二〇一九年九月四日

インタビュ―「大胆アート 京の玄関口に 絵師・吉田初三郎「京都図絵」 JR京都駅に設置」『京都新聞』二〇一九年十一月二二日

インタビュ―「アニメ「白蛇伝」できるまで」『朝日新聞』二〇二〇年一月八日

『編集後記』『梅原猛先生追悼集』（著書欄参照）

磯田 道史

● 著書

- 『オランダ商館長が見た江戸の災害』（解説、フレデリック・クレインス著）講談社 二〇一九年一二月 二八九頁
『歴史とは靴である17歳の特別教室』講談社 二〇二〇年一月 一五二頁

●論文

「長井長義の父、長井琳章が所有した和刻本『本草綱目』」『薬史学雑誌』vol.54 No.2 日本薬史学会 二〇一九年十二月 一二〇頁～一二五頁
 ●その他の執筆活動

談話「令和、中国台頭で『日本』を強く意識した」(聞き手・塩倉裕)『朝日新聞』二〇一九年四月二日

座談会「平成から令和へ 新元号のメッセージ」(辰巳正明、水上雅晴と)『朝日新聞』二〇一九年四月二日

談話「日本の議論 新元号『令和』(聞き手・酒井充)『産経新聞』(夕刊) 二〇一九年四月七日

「磯田道史の古今をちこち」(連載一二回)『読売新聞』二〇一九年四月一〇日～二〇二〇年三月一日

書評「平川南著『新しい古代史へ1 地域に生きる人びと 甲斐国と古代国家』」『毎日新聞』二〇一九年四月二八日

座談会「平成回顧・令和展望へ上」(御厨貴、河瀬直美と)『読売新聞』二〇一九年四月三〇日

対談「第23回菜の花忌シンポジウム「梟(ふくろう)の城…忍者の世界をどう読んだか」」『歴史街道』二〇一九年五月号 P H P 研究所

二〇一九年五月

「創刊59周年記念GW特別読み物 忍者・服部半蔵の子孫を探す」『週刊文春』六一巻一七号 二〇一九年五月

座談会「平成回顧・令和展望へ下」(御厨貴、河瀬直美と)『読売新聞』二〇一九年五月一日

書評「リディア・ケイン、ネイト・ピーダーセン著、福井久美子訳『世にも危険な医療の世界史』」『毎日新聞』二〇一九年六月九日

「特派記者磯田道史が行く第2弾 忍者・服部半蔵の子孫がいた!」『週刊文春』六一巻三二号 二〇一九年八月

書評「半藤一利・文、塚本やすし・絵『焼けあとのちかい』」『毎日新聞』二〇一九年八月四日

書評「久住祐一郎著『三河吉田藩・お国入り道中記』」『毎日新聞』二〇一九年九月二二日

対談「わりなきもの」を語る。『潮』七二八号 二〇一九年一〇月

対談「上皇から天皇に継承された宝物リスト初公開 天皇家「御由緒物」を鑑定する」『文藝春秋』二〇一九年一〇月

対談「豊饒なる孤独」を語る。『潮』七二九号 二〇一九年一一月

書評「この3冊」『毎日新聞』二〇一九年一一月一〇日

書評「佐藤洋一郎著『日本のイネ品種考 木簡からDNAまで』」『毎日新聞』二〇一九年十一月一〇日

対談「2020年NHK大河ドラマ『麒麟がくる』がもっと楽しくなる！ 当代一の歴史学者・特別対談 明智光秀と本能寺の変の謎をすべて語り尽くす！」（呉座勇一と）『週刊朝日』一二四卷六七号 二〇一九年二月

対談「江戸に学ぶ『経営再建』…若者vs.老人改革は愚直にやるしかない」『週刊文春』六二卷一号 二〇二〇年一月

書評「奥田昌子著『日本人の病氣と食の歴史 長寿大国が歩んだ苦難の道』」『毎日新聞』二〇二〇年一月一九日

「わが師・速水融が変えた「江戸」の貌」『文藝春秋』二〇二〇年二月

「仙台肴町公園の夜中」石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井真奈美編『梅原猛先生追悼集 天翔ける心』
国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

書評「渡辺俊経著『甲賀忍者の真実 末裔が明かすその姿とは』」『毎日新聞』二〇二〇年三月八日

談話「新型コロナ、与謝野晶子の教訓」（聞き手・岡崎明子）『朝日新聞』（夕刊）二〇二〇年三月九日

磯前 順一

● 著書

『石母田正と戦後マルクス主義史学——アジアの生産様式論争を中心に』（原秀三郎述、磯前礼子と共編）三元社 二〇一九年五月 二七一頁

『民衆宗教論…宗教的主体化とは何か』（島蘭進、安丸良夫と共著）東京大学出版会 二〇一九年五月 三八七頁

『昭和・平成精神史「終わらない戦後」と「幸せな日本人」』講談社 二〇一九年八月 二七五頁

● その他の執筆活動

書評「尾留川方孝著『古代日本の穢れ・死者・儀礼』」『週刊読書人』二〇一九年五月二四日号（三二九〇号）

「藤間生大『秩父風雲録—秩父農民闘争記』（1933年）の復刻にあたって」『アリーナ第22号』中部大学 二〇一九年一月

「梅原猛の見た夢——日本研究の国際化とは何か」石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井真奈美編『梅原猛先生追悼集—天翔ける心』 国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

『日文研がニューヨークで国際会議』『週刊読書人』二〇二〇年三月二七日号（三三三三三号）

伊東 貴之

● 論文

『明清思想與禮教——明清交替與東亜的思想世界』（中国語）『文化詮釋與諸傳統之衝擊對話』國際學術研討會論文集』國立中央研究院（臺灣）中國文哲研究所 二〇一九年九月 一頁～二〇頁（依頼論文）

● その他の執筆活動

『朱子語類』巻四「性理」篇訳注（二）二五条～三六条 恩田裕正、伊東貴之、林文孝、松下道信共訳注『中国哲学研究』第三〇号 東京大学中国哲学研究会 二〇一九年六月（査読付き）

『東アジア書道史への視座——時代や思想と拮抗する「書」の表象と痕跡——書評——松宮貴之著『書と思想——歴史上の人物から見る日中書法文化』『週刊読書人』第三三〇八号 二〇一九年九月二七日号

『建国七〇年、天安門事件（八九・六四）三〇年の節目の年に——香港問題、一国二制度の行方、そして監視社会化する中国を考える【2019年／中国文学・文化年末回顧】』『図書新聞』第三四二八号 二〇一九年二月二一日号

コラム「世界」の「中心」から遠く離れて——グローバル・ヒストリーと世界文学に寄せて—— 坪井秀人、瀧井一博、白石恵理、小田龍哉編『越境する歴史学と世界文学』臨川書店 二〇二〇年三月

稲賀 繁美

● 著書

『映しと移ろい…文化伝播の器と蝕変の実相』（編著）花鳥社 二〇一九年九月 七九二頁

『異文化へのあこがれ——国際海洋都市 平戸とマカオを舞台に——在外資料が変える日本研究——（Yearning for Foreign Cultures: An International Symposium in Hirado and A Panel in Macau, New Aspects of Japanese Studies based on Overseas Documents.）人間文化研究機構ネットワーク型基幹

研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用事業」プロジェクト関連による研究成果活用推進会議・2019年度事業報告論集」（編著）国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月 一三五頁

●論文

「エミール・ガレと万国博覧会：19世紀末ガラス産業の社会的認知闘争にまつわる備忘録メモ」『エミール・ガレのガラス』KAWADE ムック決定版 河出書房新社 二〇一九年四月 三七頁～四二頁

「平成末年記念…令和元年 日本美術のなかの猪 己亥（つちのと・い）—日本の絵画・造形における猪」『あいだ』二四七号 あいだの会 二〇一九年五月 二二頁～二七頁（依頼論文）

「Litoral & Off Shore：海と陸とのあいだ」：海洋アジア Oceanic Asia にむけた国民国家制度の解体と海賊行為の問い直しと…8年ぶりにAAS 北米アジア学会総会に参加して『あいだ』二四八号 あいだの会 二〇一九年六月 二八頁～四四頁（依頼論文）

「仮面・ベルツナ・幽霊」『美術解剖学雑誌』第二二巻 第一号 美術解剖学会 二〇一九年七月 一頁～一一頁（依頼論文）

「経験美学とその周縁…詩の受容経験・脳内映像形成との関係から—「神経系人文学と経験美学」における「基調講演…美学、経験美学、イメージ学の邂逅」を聴いて」『あいだ』二四九号 あいだの会 二〇一九年七月 一八頁～三一頁（依頼論文）

「山本芳翠・原田直次郎・黒田清輝…世界油彩美術史における19世紀末極東の位置…国際シンポジウム「美術の19世紀…ドイツと日本」から（2016年5月8日、神奈川県立近代美術館、葉山）」『あいだ』二五〇号 あいだの会 二〇一九年八月 二〇頁～三五頁（依頼論文）

「炎の試練…反植民地主義思想の往還—A・K・クーマラスワミと柳宗悦との「あいだ」を繋ぐもの」稲賀繁美編『映しと移ろい…文化伝播の器と蝕変の実相』花鳥社 二〇一九年九月 二三頁～二六二頁（査読付き）

「[耳][声][霊]…無意識的記憶と魂の連鎖について」山中由里子、山田仁史編『この世のキワー〈自然〉の内と外』アジア遊学 239 勉強出版 二〇一九年十一月 二四九頁～二六六頁

「石佛群を抱く枯山水の平原…須田国太郎のみた雲岡石窟寺院」きょうと視覚文化振興財団編『須田記念 視覚の現場』特集…関西の洋画 醍醐書房 二〇一九年十一月 九一頁～九二頁

「ヴェトナム美術の近代とは何だったのか…二村淳子『安南藝術からベトナム美術へ…フランス統治下の半世紀』を通して」『あいだ』二五二号

あいだの会 二〇一九年一月 一八頁〜二六頁 (依頼論文)

「マルローと世界美術史の構想 国際シンポジウム『アンドレ・マルロー再考—その領域横断的思考の今日的意義』『あいだ』二五三号 あいだの会 二〇二〇年二月 一二頁〜二三頁 (依頼論文)

“Under the Shadow of Apartheid: Maritime Paths of Transnational Communication,” 『異文化へのあこがれ』 (著書欄参照) 九五頁〜一〇八頁 (依頼論文)

●その他の執筆活動

「海洋亜細亜 Oceanic Asia にむけて (2) .. 「雛形としての島嶼—国際日本研究の新たな可能性」『図書新聞』三四〇〇号 二〇一九年五月 解説「日仏文化交流史のなかのギメとレガメ」フェリックス・レガメ著、林久美子訳『明治日本写生帖』角川ソフィア文庫 二〇一九年五月

「海洋亜細亜 Oceanic Asia にむけて (3) .. 「違法越境の技術—銀と阿片と飛行機と」『図書新聞』三四〇一号 二〇一九年六月

書評「〈悲〉の接触・変性と〈空〉」ケノーシスの可能性と—大乘仏教とユダヤキリスト教神学を架橋できるか『図書新聞』三四〇二号 二〇一九年六月

「火山の想像力と仏教的創作観…セザンヌ・ゴッホの創作を貫く隠された糸」『図書新聞』三四〇七号 二〇一九年七月

「命名」と「内容」との予兆論的癒着について「ナビ派」と呼ばれる画家たちの軌跡を批判的に回顧する」『図書新聞』三四〇九号 二〇一九年七月

書評「可塑的な比較造型観察理論の潜在性との隔世遺伝的再覚醒にむけて」『かたちの生命』を二〇世紀前半の知的地勢図上において縦横に吟味する」阿部成樹著『アンリ・フォションと未完の美術史…かたち・生命・歴史』岩波書店『図書新聞』三四一〇号 二〇一九年八月

「序文」『研究計画および経緯—本書への導入にかえて』『研究会の概要—あとがきにかえて』『書式と書誌についての追記』『映しと移ろい』(著書欄参照)

「〈センター通信〉Modern Japan in Comparative Imagination: An Interdisciplinary Conference at Durham University, 9-10 May, 2019 参加報告」『日文研』六三号 二〇一九年九月

「うつわに盛った中味は、そこでどう振る舞うか…一柳慧×近藤高弘「消滅」展に寄せる」『一柳慧×近藤高弘「消滅」東京画廊 二〇一九年

一一月

「無に対峙する危うい樞円の円環―大戦期の時代相に日仏関係から補助線を引く…レミ・ラブリュス氏の講演」無に相對して：1940年代のフランスの美術」の余白に」『図書新聞』三四二二号 二〇一九年一一月

「動物愛護法案の成立はなぜ犬猫殺処分行政へと繋がったのか…春藤猷一博士論文「戦後日本の動物愛護1947―2000をめぐって」」『図書新聞』三四二三号 二〇一九年一一月

「日本現代文学の英訳刊行…その舞台裏と思わぬ波及効果…片岡真伊「小説とノヴェルのあいだ…戦後期日本小説の英訳・出版現場の探求」」『図書新聞』三四二四号 二〇一九年一一月

「ミメシス美学からの解放と錯綜する東方装飾の誘惑…欧州日本趣味とイスラーム美術愛好とのあいだを三点測量する」『図書新聞』三四二四号 二〇一九年一一月

「のっぺらぼう」への誘惑…集合霊の憑依と無名性への夢」『図書』一二月号 岩波書店 二〇一九年一二月

書評「形象の生成と言語の倒錯と…常識を転倒させるひとつの大胆な前提から出発する書」平倉圭著『かたちは思考する』（東京大学出版会）

『図書新聞』三四二七号 二〇一九年一二月

「Exploring International Team Research and Collaboration for Next-generation Nichibunken Scholars（日文研次世代の国際共同研究・研究協力への模索）」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』一〇〇号 二〇一九年一二月

「風雲児・金森修を改めて追悼する―金森修著、小松美彦・坂野徹・隠岐さや香編『東洋／西洋を越境する―金森修科学論翻訳集』に寄せて」

『図書新聞』三四三一号 二〇二〇年一月

「文化人類学に学術の潮流と方向転換の兆し？2019年「読書アンケート」」『図書新聞』三四三四号 二〇二〇年二月

「金原省吾と傳抱石 帝国美術学校の沿革と中国美術留学生の周辺」『図書新聞』三四三五号 二〇二〇年二月

「アンドレ・マルロー『網と鼠』を巡って「空想の美術館」は極東からの知恵をいかに咀嚼・反芻したか」『図書新聞』三四三七号 二〇二〇年二月

「序文」「趣旨説明」「次世代の国際共同日本研究・研究協力への模索」『Exploring International Team Research and Collaboration for Next-

generation Scholars in Japanese Studies Overseas』『異文化へのあこがれ』（著書欄参照）

「象徴としての公共建築と植民地時代の記憶を宿した都市空間と——全鎮晟著『虚像のアテネ——ベルリン、東京、ソウルの記憶と空間』（佐藤静香訳、法政大学出版局）——著者との会話から」『図書新聞』三四三八号 二〇二〇年三月

「〈センター通信〉Unique or Universal? 日本とその世界文明への貢献——ワルシャワ大学日本研究創設百周年事業、招聘報告」『日文研』六四号 二〇二〇年三月

「追憶断片」石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井真奈美編『梅原猛先生追悼集——天翔ける心』国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

井上 章一

● 著書

『プロレスまみれ』宝島社 二〇一九年一〇月 二五五頁

『世界史のミカタ』（佐藤賢一と共著）祥伝社 二〇一九年二月 二九〇頁

『明智光秀と細川ガラシャ 戦国を生きた父娘の虚像と実像』（呉座勇一、フレデリック・クレインス、郭南燕と共著）筑摩書房 二〇二〇年三月 二七四頁

● その他の執筆活動

「海の向こうで日本は」（連載二〇回）『産経新聞』（夕刊）二〇一九年四月一日～二〇二〇年三月一六日
書評「この人に訊け！」（連載六回）『週刊ポスト』二〇一九年四月二日～二〇二〇年二月二日

「世界の中で日本を考える」（連載七回）『みやぎ中央新聞』二〇一九年四月二二日～二〇一九年一〇月一四日

「御簾の奥から出た天皇イメージ」『中央公論』中央公論新社 二〇一九年四月

「テーマパーク——日常から切り離された別世界」日本の近代・現代を支えた建築——建築技術100選——委員会編『日本の近代・現代を支えた建築——建築技術100選——日本建築センター 二〇一九年六月

- 対談「專訪―《厌恶京都》作者井上章一…傲慢的京都?・自卑的京都?」(中国語)『澎湃新聞』二〇一九年六月一四日
- 「伊東忠太―エントシスという幻想」筒井清忠編『昭和史講義・戦前文化人篇』筑摩書房 二〇一九年七月
- 対談「大阪しちーだいばー」『望星』東海教育研究所 二〇一九年七月
- 「未来のオフィスで働く男性たちへ」『中日新聞』二〇一九年七月一九日
- インタビュ―「あすへの手紙「みんな美人」って本当?」『中日新聞』二〇一九年七月一九日
- 「選評(第54回教育美術・佐武賞)」「教育美術」教育美術振興会 二〇一九年八月
- インタビュ―「ええやん!かんさい 大覚寺界限」『読売新聞』(夕刊) 二〇一九年八月一〇日
- 「オリンピックとマラソン」『公研』公益産業研究調査会 二〇一九年一〇月
- インタビュ―「オビニオンワイド 老年の主張」『週刊ポスト』二〇一九年一〇月
- 「性的な磁場からの風俗史」『現代風俗学研究』現代風俗研究会東京の会 二〇一九年一〇月
- 「解説」会田雄次、小松左京、山崎正和著『日本史の黒幕』中央公論新社 二〇一九年一〇月
- インタビュ―「ナポレオン 英雄の素顔は」『朝日新聞』二〇一九年一月三〇日
- 「中原淳一と目の冒険」『approach』竹中工務店 二〇一九年一月
- 「私の日本って、どこが」『読売新聞』二〇一九年二月二四日
- 「3030年の潮流を予感させる本」『週刊ポスト』二〇二〇年一月
- インタビュ―「京都を守れ」『京都市報』二〇二〇年一月
- 「選評(第23回司馬遼太郎賞)」「遼」七四号 司馬遼太郎記念館 二〇二〇年一月
- インタビュ―「どうなの?どうする?京都市」『朝日新聞』二〇二〇年一月二二日
- 「センター通信」『希望の歴史学』を読んで想ったいくつかのこと『日文研』六四号 二〇二〇年三月
- 「バワハラではありません」『公研』公益産業研究調査会 二〇二〇年三月
- 書評「中村勝著、井上史編『キネマ／新聞／カフェー 大部屋俳優・斎藤雷太郎と『土曜日』の時代』」『週刊読書人』二〇二〇年三月二七日

牛村 圭

● 論文

「文明の裁き」に応えようとした法哲学者―東京裁判弁護団長 鶴澤總明」酒匂一郎、新谷真人、福永清貴著『市民法学の新たな地平を求めて 法哲学・市民法学・法解釈学に関する諸問題 篠原敏雄先生追悼論文集』成文堂 二〇一九年八月 二五一頁～二六二頁（依頼論文）

「令和新時代に歴史意識を考える」『日本戦略研究フォーラム季報』vol.28 一般社団法人 日本戦略研究フォーラム 二〇一九年一〇月 六九頁～七四頁（依頼論文）

● その他の執筆活動

「明治日本オリエンティック事始め―スポーツ文明論試論（日文研・アイハウス連携フォーラム 2019年2月20日）」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』九九号 二〇一九年六月

「赤子を誹謗から護った人―「梅原VSブルマ論争」を顧みる」石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井真奈美編『梅原猛先生追悼集―天翔ける心』国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

榎本 渉

● 論文

「中世日本僧の中国留学―一二～一三世紀を中心に―」『MINERVA 世界史叢書 4 人々がつなぐ世界史』ミネルヴァ書房 二〇一九年八月

一四七頁～一七〇頁

● その他の執筆活動

書評「西谷功著『南宋・鎌倉仏教文化史論』」『日本歴史』八五三号 二〇一九年六月

コメント「一世紀の外交と国際情勢」『日本史研究』六九〇号 二〇二〇年二月

大塚 英志

● 著書

『感情天皇論』筑摩書房 二〇一九年四月 三三五頁

『ミュシャから少女まんがへ 幻の画家・一条成美と明治のオール・ヌーヴォー』KADOKAWA 二〇一九年七月 三六八頁

『柳田國男民主主義論集』（編集）平凡社 二〇二〇年二月 三七六頁

● 論文

「明治期のミュシャ様式文芸誌群と言文一致」『みんなのミュシャ ミュシャからマンガへ——線の魔術』日本テレビ放送網 二〇一九年七月

一九六頁～一九七頁（依頼論文）

「文化工作とまんが教育」（山本忠宏、蔡錦佳、鈴木麻紀と共著）石毛弓、小林宣之編『なぜ学校でマンガを教えるのか？』水声社 二〇一九年

一月 一四五頁～一七四頁

● その他の執筆活動

「まんがでわかるまんがの描き方」（砂威・浅野龍哉と共著）『ヤングエース』二〇一九年四月

「まんが訳道成寺縁起」『Comic Walker』二〇一九年四月

インタビュー「土曜訪問 大塚英志『感情天皇論』」『東京新聞』二〇一九年五月一八日

インタビュー「大塚英志『感情天皇論』『時事通信社』二〇一九年六月八日

「まんが訳道成寺縁起三巻本版」『Comic Walker』二〇一九年七月

『감정화하는 사회（感情化する社会）』（韓国語）리시올 二〇二〇年一月

『그 시절, 2층에서 우리는（二階の住人とその時代）』（韓国語）요다 二〇二〇年三月

楠 綾子

● 論文

「米国の日本占領政策とその転換」 山内昌之、細谷雄一編著『日本近現代史講義―成功と失敗の歴史に学ぶ』中央公論新社 二〇一九年八月
二〇三頁～二一九頁

● その他の執筆活動

「エッセイ」中曽根康弘が語る戦後日本外交』『日文研』六四号 二〇二〇年三月

「自治体への応援・受援」『ひょうご震災記念21世紀研究機構研究調査最終報告「東日本大震災復興の総合的検証」』ひょうご震災記念21世紀研究機構 二〇二〇年三月

“Has Japan's Foreign Policy Gone Beyond the Yoshida Doctrine?” *The Diplomat*, The Diplomat, March 2020

倉本 一宏

● 著書

『現代語訳 小右記8 摂政頼通』吉川弘文館 二〇一九年四月 三二五頁

『説話の形成と周縁 古代篇』（小峯和明、古橋信孝と共編）臨川書店 二〇一九年六月 二九六頁

『説話の形成と周縁 中近世篇』（小峯和明、古橋信孝と共編）臨川書店 二〇一九年七月 三〇四頁

『日本千年歴史之謎』（中国語、中公新書編集部と共著）遠足文化 二〇一九年一〇月 三二二頁

『現代語訳 小右記9「この世をば」』吉川弘文館 二〇一九年一〇月 三一二頁

『はじめての日本古代史』筑摩書房 二〇一九年一二月 三二〇頁

『公家源氏 王権を支えた名族』中央公論新社 二〇一九年一二月 二六五頁

『皇子たちの悲劇 皇位継承の日本古代史』KADOKAWA 二〇二〇年一月 二七二頁

●論文

- 『「小右記」の仮名について』『古代文化』第七一卷第一号 古代学協会 二〇一九年六月 三九頁～五六頁（依頼論文・査読付き）
- 『第一章 古代』（中国語）中公新書編集部と共著『日本千年歴史之謎』遠足文化 二〇一九年一〇月 九頁～六六頁
- 『為理解日本的一百本必読書 古代』（中国語）中公新書編集部と共著『日本千年歴史之謎』遠足文化 二〇一九年一〇月 二八六頁～二九二頁
- 『「延喜式」と頒曆』『国立歴史民俗博物館研究報告』第218号 国立歴史民俗博物館 二〇一九年一二月 一五五頁～一六五頁（依頼論文・査読付き）

●その他の執筆活動

- 『律令国家への道』『歴史街道』令和元年六月号 P H P 研究所 二〇一九年五月
- 『藤原不比等と日本古代国家』『興福』興福寺 184 二〇一九年六月
- 『現代のことば』（連載六回）『京都新聞』（夕刊）二〇一九年六月一四日～二〇二〇年三月一七日
- 『戦乱で読み解く日本古代史』『消えた豪族の虚像と実像』『一個人』No. 227 K K ベストセラーズ 二〇一九年七月
- 『日本古代国家の成立と藤原不比等』『毎日新聞』二〇一九年八月一七日
- 『「エッセイ」梅花の宴』『日文研』六三号 二〇一九年九月
- 『平和と友好の源泉とは』『TOYRO BUSINESS』二〇一九年一二月号 二〇一九年一〇月
- 『半島への出兵は、なぜ繰り返されたのか』『歴史街道』令和元年一二月号 P H P 研究所 二〇一九年一〇月
- 『「薨卒伝」で読み解く、平安貴族の生々しい人物像 平安貴族列伝』（連載九回）『Bpress』日本ビジネスプレス 二〇一九年一〇月～二〇二〇年三月
- 『私はこうして生きてきました』『津高同窓会報』三重県立津高等学校同窓会 二〇一九年一二月
- 『はがき通信』『日本歴史』第八五九号 吉川弘文館 二〇一九年一二月
- 『人文知のフロンティア 即位できなかった皇子たち』『京都新聞』二〇二〇年一月二二日
- 『梅原先生からの手紙』石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井眞奈美編『梅原猛先生追悼集―天翔ける心』

国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

フレデリック・クレインス

●著書

『オランダ商館長が見た江戸の災害』（磯田道史解説）講談社 二〇一九年十二月 二八九頁

『明智光秀と細川ガラシャ 戦国を生きた父娘の虚像と実像』（井上章一、呉座勇一、郭南燕と共著）筑摩書房 二〇二〇年三月 二七四頁

●論文

「イエズス会士が作り上げた光秀・ガラシャ像」『明智光秀と細川ガラシャ』（著書欄参照） 八七頁～一七三頁

“The VOC archives as a valuable source for the history of early modern Japan,” 稲賀繁美編『異文化へのあこがれ―国際海洋都市 平戸とマカオを舞台に―在外資料が変える日本研究―人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「日本関連在外資料調査研究・活用事業」プロジェクト関連携による研究成果活用推進会議・2019年度事業報告論集』国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月 一九頁～三〇頁（依頼論文）

「平戸オランダ商館の設立経緯について」『平戸紀要』第八号 二〇二〇年三月 二八頁～四八頁

●その他の執筆活動

「モンターヌスのもう一つの富士山図」『日文研』六三号 二〇一九年九月

「なぜ江戸幕府はオランダの高性能な消化ポンプを導入しなかったのか？」『現代新書ウェブ』講談社 二〇一九年十二月

「時代劇よりも面白いオランダ人の江戸体験記」『本』二〇二〇年一月号 講談社 二〇二〇年一月

「江戸の大火に襲われたオランダ商館長ワーヘナールの手紙から伝わるもの」『現代新書ウェブ』講談社 二〇二〇年一月

書評「小川仁著『シビオーネ・アマーティ研究 慶長遣欧使節とバロック期西欧の日本像』」総人・人環フォーラム』vol.38 京都大学大学院人間・環境学研究科 二〇二〇年二月

「明智光秀図」『日文研』六四号 二〇二〇年三月

「あとがき」井上章一、呉座勇一、フレデリック・クレインス、郭南燕著『明智光秀と細川ガラシャ 戦国を生きた父娘の虚像と実像』筑摩書房 二〇二〇年三月

呉座 勇一

● 著書

『日本中世への招待』朝日新聞出版 二〇二〇年二月 二八八頁

『明智光秀と細川ガラシャ 戦国を生きた父娘の虚像と実像』（井上章一、フレデリック・クレインス、郭南燕と共著）筑摩書房 二〇二〇年三月 二七四頁

● 論文

「南北朝内乱と『太平記』史観―王権論の視点から―」松尾章江編『軍記物語講座 第三卷 平和の世は来るか 太平記』花鳥社 二〇一九年

一〇月 二二四頁〜二三九頁（査読付き）

「明智光秀と本能寺の変」『明智光秀と細川ガラシャ』（著書欄参照） 一三頁〜八六頁

「中世熊野と戦乱―文学と歴史のあいだ―」『軍記と語り物』56号 軍記・語り物研究会 二〇二〇年三月 四頁〜一六頁（依頼論文）

● その他の執筆活動

書評「原武史著『平成の終焉』」『朝日新聞』 二〇一九年四月二七日

「俗流歴史本と対峙する」『中央公論』 二〇一九年六月号 二〇一九年五月

書評「光成準治著『小早川隆景・秀秋』」『朝日新聞』 二〇一九年五月一日

インタビュ「令和の知をひらく（4）絶対の正解求める危うさ」『日本経済新聞』 二〇一九年五月二三日

書評「内藤正典著『外国人労働者・移民・難民ってだれのことう？』」『朝日新聞』 二〇一九年五月二五日

書評「森先一貴、近江俊秀著『境界の日本史』」『朝日新聞』 二〇一九年六月一日

エッセイ「歴史小説家と歴史学者」『公研』 二〇一九年八月号 二〇一九年八月

書評「古谷浩一著『林彪事件と習近平』、楊海英編『中国が世界を動かした「1968」』」『朝日新聞』二〇一九年八月三日

書評「黒嶋敏編『戦国合戦へ大敗』の歴史学」『朝日新聞』二〇一九年八月一七日

書評「小泉悠著『帝国』ロシアの地政学」『朝日新聞』二〇一九年九月七日

書評「坂上泉著『へぼ侍』」『朝日新聞』二〇一九年九月二八日

書評「大澤絢子著『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』」『朝日新聞』二〇一九年一〇月一二日

対談「歴史と物語の交点…『太平記』の射程」(兵藤裕己と)『アナホリッシュ国文学』響文社 二〇一九年一一月

書評「稲葉振一郎著『AI時代の労働の哲学』、銀河帝国は必要か?」『朝日新聞』二〇一九年一一月九日

対談「2020年NHK大河ドラマ「麒麟がくる」がもっと楽しくなる! 当代一の歴史学者・特別対談 明智光秀と本能寺の変の謎をすべて語り尽くす!」(磯田道史と)『週刊朝日』一二四卷六七号 二〇一九年一二月

「共同研究「応永・永享期文化論」の紹介」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』一〇〇号 二〇一九年一二月

書評「今津勝紀著『戸籍が語る古代の家族』」『朝日新聞』二〇一九年一二月七日

インタビュー「歴史学者が見る安倍政権「江戸幕府より豊臣政権に近い」」『朝日新聞』二〇二〇年一月七日

書評「加藤陽子著『天皇と軍隊の近代史』」『朝日新聞』二〇一九年一月一日

エッセイ「意外と知らない日本中世社会」『一冊の本』二〇二〇年二月号 朝日新聞出版 二〇二〇年二月

エッセイ「地方自治体と歴史学者」『公研』二〇二〇年二月号 二〇二〇年二月

書評「アリエット・ド・ボダール著『茶匠と探偵』」『朝日新聞』二〇二〇年二月一五日

書評「古川隆久著『建国神話の社会史』」『朝日新聞』二〇二〇年三月七日

小松 和彦

●著書

『カラー版 重ね地図で読み解く京都の「魔界」』(監修) 宝島社 二〇一九年七月 二二三頁

『伝承や古典にのこる！ 日本の怖い妖怪1 里の妖怪たち』（監修、中山けーしょー作・絵）ほるぶ出版 二〇一九年二月 六四頁

『伝承や古典にのこる！ 日本の怖い妖怪2 水辺と道の妖怪たち』（監修、中山けーしょー作・絵）ほるぶ出版 二〇二〇年二月 六四頁

『伝承や古典にのこる！ 日本の怖い妖怪3 山の妖怪たち』（監修、中山けーしょー作・絵）ほるぶ出版 二〇二〇年二月 六四頁

●その他の執筆活動

『封印された神と妖怪の記憶を発掘する1 葛城山の土蜘蛛』『怪と幽』Vol. 001 KADOKAWA 二〇一九年四月

『マイ・フェイバリット緑紅さん 秋の奇祭 描写細かく写真も豊富』『京都新聞』二〇一九年四月一六日

『比較妖怪学の可能性』『驚異と怪異 想像界の生きものたち』河出書房新社 二〇一九年八月

『封印された神と妖怪の記憶を発掘する2 鞍馬の竹伐り会式の向こう側へ』『怪と幽』Vol. 002 KADOKAWA 二〇一九年八月

『春画展をつうじて日本人とは何かをドラマチックに問う』『文化記録映画 春画と日本人（パンフレット）』ヴィジュアルフォークロア

二〇一九年九月

インタビュー「夜と日本人」『Ace』No. 265 日本リサーチセンター 二〇一九年一〇月

“What Is a Yokai?” *Yokai: Ghosts, Demons & Monsters of Japan*, Museum of New Mexico Pr. November 2019

『封印された神と妖怪の記憶を発掘する3 鞍馬の天狗の正体を探る』『怪と幽』Vol. 003 KADOKAWA 二〇一九年一二月

“FROM THE PAST INTO THE FUTURE: THE ENDURING LEGACY OF YOKAI,” *Japan Supernatural: Ghost, Goblins, and Monsters, 1700 to Now*, Art

Gallery of New South Wales, January 2020

書評「神戸新聞社編『新五国風土記 ひょうろ彩祭』神戸新聞総合出版センター」『神戸新聞』二〇二〇年二月九日

インタビュー「『怖れ』は宗教的観念の土壌である」『道標』2020年春季号 萬福寺 二〇二〇年三月

『お別れの会 世話人代表・挨拶』石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井真奈美編『梅原猛先生追悼集—

天翔ける心』国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

『途方もなく大きな「知の器」——梅原猛さんを偲んで』石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井真奈美編

『梅原猛先生追悼集—天翔ける心』国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

白石 恵理

● 著書

『越境する歴史学と世界文学』（坪井秀人、瀧井一博、小田龍哉と共編著）臨川書店 二〇二〇年三月 二二六頁

● 論文

「見立てと写しのアイヌ戯画―メディアとしての〈夷酋列像〉」稲賀繁美編『映しと移ろい…文化伝播の器と蝕変の実相』花鳥社 二〇一九年九月 五五頁〜七七頁

● その他の執筆活動

「〈エッセイ〉ビータがいた時間」『日文研』六四号 二〇二〇年三月

（翻訳）テッサ・モーリス・スズキ「移りゆく日本研究の境界（フロンティア）」『越境する歴史学と世界文学』（著書欄参照）

「格別の気配とともに」『梅原猛先生追悼集』編集委員会編『梅原猛先生追悼集―天翔ける心』国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

関野 樹

● 論文

“Using Uncertain Time Intervals in Linked Data” *International Journal of Geoinformatics* 15(2), Association for Geoinformation Technology, June 2019, pp. 15-23（査読付[※]）

“HuTime Ontology to Represent Uncertain Time Intervals,” Proceedings of Workshop “Ontologies for Linked Data in the Humanities,” *Digital Humanities Conference 2019, DH2020 SIG-LO*, July 2019（査読付[※]）

「時間名による時間参照基盤の構築―Linked Dataを用いた期間の記述とリソース化」『情報処理学会シンポジウムシリーズ じんもんこん 2019 論文集』情報処理学会 二〇一九年十二月 二六七頁〜二七二頁（査読付[※]）

“Data description and retrieval using periods represented by uncertain time intervals,” *Journal of Information Processing* 28, 情報処理学会, February 2020, pp. 91-99（査読付[※]）

瀧井 一博

● 著書

Rechtstransfer in der Geschichte: Internationale Festschrift für Wilhelm Brauner zum 75. Geburtstag. (ドイツ語) Gábor Hamza, Milan Hlavacka, and

Kazuhito Takii eds., Peter Lang Pub Inc, October 2019, 420 pages.

『日本政治史―現代日本を形作るもの 歴史のなかに現在をみる』(清水唯一朗、村井良太と共著) 有斐閣 二〇二〇年一月二五日 三一二頁

『越境する歴史学と世界文学』(坪井秀人、白石恵理、小田龍哉と共編著) 臨川書店 二〇二〇年三月 二二六頁

● 論文

「立憲革命としての明治維新」山内昌之、細谷雄一共編著『日本近現代史講義―成功と失敗の歴史に学ぶ』中央公論新社 二〇一九年八月
三一頁～四八頁

“Tō Hirobumi and der japanische Konstitutionalismus. Ein kurzes Porträt eines Verfassungsdenkers,” (ドイツ語) Gábor Hamza, Milan Hlavacka, and
Kazuhito Takii eds., *Rechtstransfer in der Geschichte: Internationale Festschrift für Wilhelm Brauner zum 75. Geburtstag*, Peter Lang Pub Inc, October
2019, pp.395–406

● その他の執筆活動

「伊藤博文関係文書」のデジタル化に寄せて―『伊藤博文秘録』講読のころ』『国立国会図書館月報』六九六号 二〇一九年四月

「論点 「文化国家」へ 地方再生から」『読売新聞』二〇一九年四月一二日

「政治学の古典を読む (二七) 哲人政治による民主政治の断罪 (プラトン (藤沢令夫訳) 『国家』上・下、岩波文庫、一九七九年)」「究」第九八
号 ミネルヴァ書房 二〇一九年五月

「政治学の古典を読む (二八) 宗教復権時代の政治的教養 (野田宣雄『教養市民層からナチズムへ―比較宗教社会史のこころみ』名古屋大学出
版会、一九八八年)」「究」第一〇一号 ミネルヴァ書房 二〇一九年八月

「現代のことば」(連載三回)『京都新聞』(夕刊) 二〇一九年八月二〇日～二〇一九年十二月一〇日

「政治学の古典を読む (二九) 「国制知」への道しるべ (上山安敏『法社会史』みすず書房、一九六六年)」「究」第一〇四号 ミネルヴァ書房

二〇一九年十一月

「松下村塾の学びの実践―伊藤博文の場合―」『至誠館大学 吉田松陰研究所紀要』第1号 至誠館大学 吉田松陰研究所 二〇一九年十二月

「結ぶ人―渡邊洪基の生涯」『MICHÉ』06 Opa Press 二〇一九年十二月

「誘惑者の言葉」石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井眞奈美編『梅原猛先生追悼集―天翔ける心』国際

日本文化研究センター 二〇二〇年三月

コラム「グローバル・ヒストリーと『世界文学』の対話に寄せて」『越境する歴史学と世界文学』（著書欄参照） 一一頁―一三頁

坪井 秀人

● 著書

『文藝年鑑2019』（日本文藝家協会編、共著）新潮社 二〇一九年六月 六〇〇頁

『戦後日本文化再考』（編著）三人社 二〇一九年一〇月 六〇三頁

『越境する歴史学と世界文学』（瀧井一博、白石恵理、小田龍哉と共編著）臨川書店 二〇二〇年三月 二二六頁

● 論文

「旧満洲留用者たちの戦後…雑誌『ツルオカ』とその周辺」『ツルオカ【復刻版】』三人社 二〇一九年七月 一頁―一〇頁

「佐藤一英の位置」『図録 尾張に生きた詩人 佐藤一英展』一宮市博物館 二〇一九年一〇月 四頁―八頁（依頼論文）

「文芸都市としての名古屋」愛知県史編さん委員会編『愛知県史 通史編10 年表・索引（付録CD-ROM）』愛知県 二〇二〇年三月 三五二

―三五五頁

「序論 グローバル・ヒストリーと世界文学を以て日本語文学」『越境する歴史学と世界文学』（著書欄参照） 一頁―八頁

「転形期としての一九八九年と元号問題」『昭和文学研究』第80集 昭和文学会 二〇二〇年三月 四三頁―五五頁（依頼論文・査読付き）

ジョン・ブリーン

● 論文

“Contested emperors” Joy Hendry ed., *Understanding Japanese Society (5th edition)*, Routledge, May 2019, pp. 256-256 (査読付※)

“Abdication, Succession and Japan’s Imperial Future: An Emperor’s Dilemma” *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, May 2019, pp. 1-15 (査読付※)

“Japon’a nun Emperyalist Gelecegi: Bir Imparatorun Ikilemi.” (その他外国語) *Turque Diplomatique*, June 2019, pp. 25-28 (依頼論文 査読付※)

“Shinto in Meiji Japan: Reflections on Ise” Kurt and Yukiko Duke Bergman eds., *Japan’s Past and Present*, Boktorlagest Stople, March 2020, pp. 488-505

● その他の執筆活動

(編集) *Japan Review* vol.34 (2019), International Research Center for Japanese Studies, December 2019

「センター通信」二〇一九年日文研特別公開シンポジウム：「天皇と皇位継承―過去と現在の視座」について『日文研』六四号 二〇二〇年三月

古川 綾子

● 著書

『想像×創造する帝国 吉田初三郎 鳥瞰図への誘い』(劉建輝、石川肇と共編) 国際日本文化研究センター 二〇一九年八月 一三四頁

● その他の執筆活動

「国際日本文化研究センターにおける浪曲SPレコード・デジタルアーカイブの取組」『ひびろす』85・86合併号 国立国会図書館 二〇一九年

一〇月

「エッセイ」ゆりやんレトリィバアとミス・ワカナ―魅力的な女性芸人について―『日文研』六四号 二〇二〇年三月

細川 周平

● 著書

『いま、ことばを立ち上げること』（林香里、細見和之、石井伸介と共著）関西学院大学出版会 二〇一九年一月 九九頁

Sentiment Language, and the Arts: The Japanese- Brazilian Heritage, Brill, December 2019, 386 pages.

● その他の執筆活動

「武本由夫賞の終わりを聞いて」『ブラジル日系文学』ブラジル日系文学社 二〇一九年七月

「ジョアン・ジルベルトへの想いあふれて」『Jazz Tokyo』Jazz Tokyo 二〇一九年八月

「ブラジルで書く日本語」松井太郎の場合、対談「シンポジウム いま、ことばを立ち上げること」『いま、ことばを立ち上げること』（著書欄

参照）

「追悼 ジョアン・ジルベルト 『調子はずれ』の鼻唄歌手」『ERIS』vol.28 エリスメディア 二〇一九年十一月

「ビビノオト サカキマンゴー『ビンテクライベイベ』」『ERIS』vol.28 エリスメディア 二〇一九年十一月

「如月小春を思い出す」2020 Kisaragi Koharu BOOK 編集部・編著『2020 Kisaragi Koharu Book』LABO! 二〇二〇年一月一日

「センター通信」パリを退屈させなかった旗本」『日文研』六四号 二〇二〇年三月

前川 志織

● 著書

『草の根のアール・ヌーヴォー…明治期の文芸雑誌と図案教育』（編著）国際日本文化研究センタープロジェクト推進室 二〇一九年十一月八

日 四一頁

● 論文

「キャラクターの喩えとしての童画——戦間期日本の新聞広告にみる洋菓子の意味の変遷と子ども像」『大正イマジュリイ』14号 大正イマジュ
リイ学会 二〇一九年五月三十一日 五〇頁〜七四頁（査読付き）

「戦間期東アジアにおける森永製菓の販売促進・広告戦略と新聞広告」『『大正イマジュリイ』別冊「戦間期東アジアにおける大衆的図像の視覚文化論——新聞広告を中心に」』国際シンポジウム報告書編集委員会 二〇二〇年三月 一七一頁～一八六頁

「関東大震災とその復興期における洋菓子広告宣伝をめぐる視覚的イメージ」『文化學年報』69号 同志社大学文化学会 二〇二〇年三月 二六九頁～二八八頁

●その他の執筆活動

報告「新聞広告とアール・ヌーヴォー風図案——明治30～40年代における文芸雑誌表紙絵と京都高等学校図案科学生作品を手がかりに」『『大正イマジュリイ』別冊「戦間期東アジアにおける大衆的図像の視覚文化論——新聞広告を中心に」』国際シンポジウム報告書編集委員会 二〇二〇年三月

「〈センター通信〉展覧会「草の根のアール・ヌーヴォー——明治期の文芸雑誌と図案教育」を担当して」『日文研』六四号 二〇二〇年三月

松木 裕美

●その他の執筆活動

“Isamu Noguchi - Beyond Borders” *Pleasure Garden Magazine* vol. 6, The Garden Edit, November 2019

(インタビュー) “Comme si les modernes n'existaient pas... Entretien avec Terumobu Fujimori” (フランス語) *D'architectures* vol. 276, INNOVAPRESSE, November 2019

松田 利彦

●論文

「朝鮮総督在任期における南次郎の陸軍統制構想と対外戦略構想」『二十世紀研究』第20号 二十世紀研究編集委員会 二〇一九年一二月 八三頁～一〇四頁（査読付き）

●その他の執筆活動

- 「共同研究「植民地帝国日本における知と権力」を终えて」『鴨東通信』108号 思文閣出版社 二〇一九年四月
- 「第3回東アジア日本研究者協議会国際學術大会を終えて」『NICHIBUNKEN NEWSLETTER』九九号 二〇一九年六月
- （書評）Carter J. Eckert, *Park Chung Hee and Modern Korea: The Roots of Militarism, 1866-1945* (Harvard University Press, 2016) (二〇一九年一〇月)
- 『日本研究』第五九集 国際日本文化研究センター 2019年10月（査読付き）
- 「日韓の歴史をたどる」⑬「文化政治」『赤旗』二〇一九年十一月六日
- 「2・8宣言／3・1運動と朝鮮植民地支配体制の転換 警察を中心に」在日本韓国YMCA編『未完の独立宣言』新教出版社 二〇一九年二月
- 「センター通信」共同研究「植民地帝国日本における知と権力」あとがきのあとがき『日文研』六四号 二〇二〇年三月

光平 有希

●その他の執筆活動

- 「音楽療法、江戸の昔から―養生の知見たぐり「起源は戦後」の常識覆す―」『日本経済新聞』二〇一九年八月二日
- 解説「（口絵解説）「はしか絵」（日文研・宗田文庫より）」『日本研究』第五九集 国際日本文化研究センター 二〇一九年一〇月
- 書評「ロテム・コーナー著『白から黄へ―ヨーロッパの人種観にみる日本人1300〜1783年』」『日本研究』第五九集 国際日本文化研究センター 二〇一九年一〇月
- 書評「謝心範著『養生の智慧と氣の思想―貝原益軒に至る未病の文化を読む―』」『日本医史学雑誌』第六五卷第三号 日本医史学会 二〇一九年十一月
- 「〈エッセイ〉ジャボニズム楽曲探訪記」『日文研』六四号 二〇二〇年三月
- 「19世紀イタリア楽壇における日本への眼差し―ローマ・ナポリ・フィレンツェでの調査を終えて―」『ぎゅし』vol.4 人間文化研究機構 二〇二〇年三月

安井 眞奈美

● 論文

「ハワイと故郷の島を結ぶ——山口県沖家室島の雑誌『かむろ』より」『立命館言語文化研究』31巻1号 立命館言語文化研究所 二〇一九年七月 八三頁〜九四頁（依頼論文）

「妖怪画に描かれた身体―目の妖怪を中心に」山中由里子、山中仁編『この世のキワー〈自然〉の内と外』アジア遊学 239 勉誠出版 二〇一九年十一月 一六三頁〜一七三頁

“Changing Folk Cultures of Pregnancy and Childbirth,” trans. Lucy Fraser and Madelein Shimizu. In *The Routledge Companion to Gender and Japanese Culture*, eds. Jennifer Coates, Lucy Fraser, and Mark Pendleton. Routledge, December 2019, pp. 135–45（査読付き）

“Změna vnímání lidského plodu v Japonsku. Úvaha o péči poskytované truchlícím v případě perinatální ztráty” (The Transformation of Fetus Perspectives in Japan—Considering Perinatal Grief Care), trans. Jakub Hrubý. *Nový Orient* vol. 74 (2019)/1, Oriental Institute of the Czech Academy of Sciences, March 2020, pp. 16–23（その他外国語）（依頼論文）

● その他の執筆活動

報告「身体と儀礼」パネル発表、JAWS (Japan Anthropology Workshop 日本人類学ワークショップ) につ (2019年4月15日)『国際日本文化研究センター (Web サイト)』 二〇一九年四月

報告「SOAS University of London (ロンドン大学 SOAS) の JRC につセミナー発表 (2019年4月23日)』『国際日本文化研究センター (Web サイト)』 二〇一九年四月

書評「伏見裕子著『近代日本における出産と産屋——香川県伊吹島の産屋の存続と閉鎖』『文化人類学』vol. 84-1 二〇一九年六月（査読付き）

「編集後記」『日本研究』第五九集 国際日本文化研究センター 二〇一九年一〇月

報告「チェコ科学アカデミーと日文研との交流 (2019年10月〜11月)』『国際日本文化研究センター (Web サイト)』 二〇一九年十一月

報告「シンポジウム「医の世界における明清細工と江戸風物の邂逅」(北京大学科学技术・医学史学院)に参加して」『国際日本文化研究セン

ター (Web サイト)』二〇一九年一月

報告「能登・輪島市立七浦公民館のフォーラムに参加して (2019年11月17日)」『国際日本文化研究センター (Web サイト)』二〇一九年十二月

報告「コロンビア大学・日文研共催講演会「日本における聖なるもの、差別、そして死者の霊」の開催」『国際日本文化研究センター (Web サイト)』二〇一九年十二月

「センター通信」共同研究会「身体イメージの想像と展開」を立ち上げて『日文研』六四号 二〇二〇年三月

報告「特別展 JAPAN SUPERNATURAL がシドニーで開催されました」『国際日本文化研究センター (Web サイト)』二〇二〇年三月

報告「The report of the JAPAN SUPERNATURAL exhibition in Sydney」『国際日本文化研究センター (Web サイト)』二〇二〇年三月

『編集後記』『日本研究』第六〇集 国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

山田 奨治

●その他の執筆活動

インタビュー「(コメント) 違法ダウンロード 規制強化政府足踏み」『中国新聞』他 二〇一九年八月一六日他

「ダウンロード違法化拡大」稲賀繁美編『映しと移ろい…文化伝播の器と蝕変の実相』花鳥社 二〇一九年九月

「センター通信」共同研究会「縮小社会の文化創造…個・ネットワーク・資本・制度の観点から」のこと『日文研』六四号 二〇二〇年三月

「梅原猛先生のこと」石川肇、井上章一、岩水久美、榎本渉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井眞奈美編『梅原猛先生追悼集―天翔ける心』

国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

劉 建輝

●著書

『想像×創造する帝国 吉田初三郎 鳥瞰図への誘い』(石川肇、古川綾子と共編) 国際日本文化研究センター 二〇一九年八月 一三四頁

●その他の執筆活動

インタビュ―「大正の観光地図がよみがえる―吉田初三郎が描いた鳥瞰図」『はれ予報』二〇一九年五月号 日経B Pコンサルティング社

二〇一九年五月

インタビュ―「江戸期の日中―アートが結ぶ」『読売新聞』二〇一九年五月三〇日

インタビュ―「京都动画大火震惊世界背后…一代代的记忆与从未中断过的批判」(中国語)『澎湃新聞』二〇一九年七月二〇日

インタビュ―「大正の広重」地図絵師・吉田初三郎―鳥瞰図描いた富士山の謎』『京都新聞』二〇二〇年一月三〇日

マルクス・リュッターマン

●その他の執筆活動

“Übereinstimmung ist ‘außerhalb der menschlichen Zeit’. Kurssorisch über Subjektivität und Partikularität zum Ende der Ära Heisei.” (ドイツ語)

Weile, ohne zu wohnen. Festschrift für Peter Pörner (= MOAG) vol. 150, Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens e.V., December 2019

「センター通信」 「思煩之時」―礼儀作法の歴史を文書から研究する意義について』『日文研』六四号 二〇二〇年三月

「普遍論の一コマ―梅原猛とハンス・アルバートとの仮想対談」石川肇、井上章一、岩水久美、榎本涉、呉座勇一、関野樹、深見清治、安井

眞奈美編『梅原猛先生追悼集―天翔ける心』 国際日本文化研究センター 二〇二〇年三月

日文研 六十五号

二〇二〇（令和二）年九月三〇日発行

編集 榎本 渉、白石恵理

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ファックス (〇七五) 三三五―二〇九一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社



NICHIBUNKEN